

大橋町遺跡

第1次－1～6調査発掘調査報告書

新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業(大橋5)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月

神戸市教育委員会

大橋町遺跡

第1次－1～6調査発掘調査報告書

新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業(大橋5)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月

神戸市教育委員会

序

大橋町遺跡は、神戸市長田区大橋町5丁目に存在する遺跡です。ここJR新長田駅南地区は昭和59年度から神戸市の西の副都心としてまちづくりを計画して参りました。平成7年1月17日に発生した「兵庫県南部地震」により一時頓挫しました。特に長田区は地震・火災による死傷者が多く壊滅的な被害を受けました。しかし神戸市・他自治体・ボランティアなどの協力と、市民の方々自身の力により日々着実に復興していました。神戸市は「神戸市復興計画」の中で西部市街地復興計画として震災復興事業の一環と位置づけ、計画を実行して参りました。その結果、現在では再開発ビルが着実に完成し、計画が現実のものとなっています。

本報告書は、このような震災復興事業の進展と共に行なってきた発掘調査の成果をまとめたものです。大橋町遺跡では主に平安時代末から鎌倉時代初頭の建物・井戸・墓などが発見されました。特にこの度の調査では『屋敷墓』と呼ばれる平安時代後半から鎌倉時代にかけての特徴的な遺構が存在し、当時の一般的な集落の習俗に触れるができる重要な資料を得ることができました。このような調査成果が市民の皆様の目に触れ、活用されることがあれば幸いと思います。

最後になりましたが、調査中諸関係機関・近隣住民の皆様方にはご協力をいただき、誠にありがとうございました。

平成18年
神戸市教育委員会
教育長 小川 雄三

例　　言

1. 本報告書は、新長田駅南震災復興第二種市街地再開発事業に伴い神戸市都市計画総局より委託され、神戸市教育委員会・(財)神戸市体育協会が実施した、大橋町遺跡第1次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本報告書の発掘調査地点は、神戸市長田区大橋町5丁目に所在する。
3. 発掘調査の次数・期間・面積については、本文「第1章 第3節 調査経緯」に詳しい。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸市首都」「神戸市南部」及び神戸市発行の2500分の1地形図「大橋」を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系第V系(日本測地系)に属する。また、標高は東京湾中等潮位(T.P.)で表示した。
6. 本書の執筆・編集は、中谷正が行なった。
7. 遺構写真は、中谷正が撮影した。遺物写真については独立行政法人 奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導を得て、西大寺フォト 杉本和樹氏が撮影した。また金属製品のX線写真については、中村大介が撮影した。
8. 本書に係わる遺物は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 現地調査実施では、神戸市都市計画総局及び近隣住民の方々にご協力いただいた。

目 次

序

例言

第1章 はじめに	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 周辺の遺跡	2
第3節 調査経過	6
第4節 調査組織	8
第2章 調査成果	9
第1節 基本層序	9
第2節 検出遺構	10
1 掘立柱建物	11
2 井戸	16
3 土坑	20
4 墓	21
5 水溜状造構	22
6 落ち込み	22
7 溝	24
8 ピット	29
9 鋤溝	30
第3章 まとめ	32
第1節 遺跡の変遷	32
第2節 屋敷墓	34
第3節 結びにかえて	38

挿図目次

図1 大橋町遺跡位置図	1	図19 S B109・出土遺物	16
図2 周辺的主要道路(1:25,000)	3	図20 S E101	16
図3 大橋町遺跡位置図	7	図21 S E102	17
図4 調査地地区割図	7	図22 S E103	17
図5 基本土層図	9	図23 S E104	17
図6 調査地平面図	10	図24 S E104出土遺物	18
図7 調査地平面図(主要遺構)	11	図25 S E105	19
図8 S B101	12	図26 S E106	19
図9 S B102	12	図27 S E107	19
図10 S B104	12	図28 S K101	20
図11 S B104出土遺物	13	図29 S K102	20
図12 S B103	13	図30 S K102出土遺物	20
図13 S B105	13	図31 S K103	20
図14 S B105出土遺物	13	図32 S K104	21
図15 S B106出土遺物	14	図33 S K105	21
図16 S B106	14	図34 S K106	21
図17 S B107	15	図35 S T101	21
図18 S B108	15	図36 S T101出土遺物	22

図37	S X101	23	図44	S D2001	29
図38	S D1101	24	図45	S P1236	30
図39	S D1101出土遺物	24	図46	ビット出土遺物	30
図40	S D1103出土遺物	25	図47	鍛溝出土遺物	30
図41	S D1103・1104	26	図48	鍛溝変遷図	31
図42	S D1105	27	図49	平安時代末～鎌倉時代初頭の建物分布	33
図43	S D1105出土遺物	28	図50	東建物群(星敷)平面図	35

表 目 次

表1	調査経過表	6	表3	神戸市屋敷墓一覧1	36
表2	出土石器一覧	9	表4	神戸市屋敷墓一覧2	37

挿図写真目次

挿図写真1	空中写真撮影状況	7	挿図写真6	S D1105遺物出土状況1(43)(南西から)	25
挿図写真2	トライヤーの中学生作業風景	7	挿図写真7	S D1105遺物出土状況2(42)(西から)	25
挿図写真3	S B106P-14遺物出土状況(南から)	14	挿図写真8	S D2001(南西から)	29
挿図写真4	S E108掘削状況(西から)	19	挿図写真9	S P1236遺物出土状況(南から)	29
挿図写真5	S X101盛土断面(南東から)	22	挿図写真10	鍛溝掘削状況	30

写真図版目次

写真図版1	1 第1次-1 調査地全景(北東から) 2 第1次-2 緊査地全景(北東から)		写真図版10	1 S E107(南西から) 2 S E105(北西から) 3 S K102(南東から)	
写真図版2	1 第1次-3 緊査地全景(北西から) 2 第1次-4 調査地全景(北西から)		写真図版11	1 摟立柱建物・ビット・水溜・落ち込み出土遺物 2 S E104出土遺物1	
写真図版3	1 S B101(北西から) 2 S B102(北西から) 3 S B103(南東から) 4 S B104(南東から)		写真図版12	1 S E104出土遺物2 2 S K102出土遺物 3 S T101出土遺物	
写真図版4	1 S B105(北西から) 2 S E101(南東から)		写真図版13	1 S P1236出土遺物 2 S X103出土遺物 3 S D1101出土遺物 4 S D1105出土遺物 5 砥石 6 出土石錐	
写真図版5	1 S E102(南西から) 2 S E103(北西から) 3 S E104(北西から)		写真図版14	1 溝・鍛溝出土遺物 2 遺物包含層出土遺物1	
写真図版6	1 第1次-5 緊査地全景(南東から) 2 S X101(南東から)		写真図版15	1 遺物包含層出土遺物2 2 出土鉄製品	
写真図版7	1 第1次-6 調査地全景(北東から) 2 第1次-6 緊査地全景(南東から)				
写真図版8	1 S B106(北東から) 2 S B108(北西から)				
写真図版9	1 S B107(北西から) 2 S E106(北東から) 3 S T101(南西から)				

第1章 はじめに

第1節 遺跡の立地

大橋町遺跡が存在する神戸市長田区は神戸市域のはば中央に位置し、近代以降「西神戸」として神戸市域海岸部西部の中核的な役割を果たしてきた。平成7年1月に兵庫県南部地震(阪神淡路大震災)が発生し壊滅的な被害を被ったが、震災前に計画されていた再開発が本格的に開始され、現在は神戸副都心として再開発ビルが次々に建設され都市化が進んでいる。

地形の面では、いわゆる六甲山南麓に所在しており、この一帯には大小の河川が数多く存在し、山間部から河口の平野部に大量の土砂を供給してきた。しかし、六甲山系の山々と海岸部の距離が短く、比較的急勾配であるため、大規模な扇状地は形成されなかった。長田区周辺は旧刈灘川と妙法寺川という2つの河川に囲まれた地区で、比較的安定した微高地が広がっている。大橋町遺跡の南側に位置する中世の集落である二葉町遺跡などは微高地の突端部に位置する。また大橋町遺跡もちょうど微高地が張り出す部分にあり、遺跡を形成するに良好な場所に占地しているものと考えられる。実際、発掘調査でも南側では遺構の密度が希薄になり、湿地状の堆積が見られるようになることが解っている。おそらく現在の国道2号線あたりに湿地状の地形が形成され、腕塚町・二葉町5・6丁目周辺にまた微高地が形成され、それに遺跡が立地したものと考えられる。



図1 大橋町遺跡位置図

第2節 周辺の遺跡

大橋町遺跡は、調査の結果弥生時代から中世までの遺跡であることが判明した。ここでは周辺の遺跡の動向について概観する。

弥生時代

前期には環濠集落として有名な大間遺跡、多数の貯蔵穴が発見された楠・荒田町遺跡、小区画水田が発見された須磨区の戎町遺跡などが存在していた。中期になると、楠・荒田町遺跡、上沢遺跡、戎町遺跡などはさらに発展し地域の中心的な集落に発展していった。後期～末期になると、集落数が増加する。祇園遺跡、上沢遺跡、長山神社境内遺跡、御歳遺跡、大手町遺跡などである。一方、楠・荒田町遺跡や戎町遺跡のような大規模な遺跡では住居などが急激に減少し、集落が縮小した。

古墳時代

古墳時代初頭は、弥生時代末期の集落が引き続いている存在する。この時期に築造されたと考えられる得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳などは、これらの集落の首長の墓と考えられている。その後、中期～後期には、大橋町遺跡に近接する長田区松野遺跡では集落に併し、豪族居館と思われる横列に囲まれた建物群が発見された。神楽遺跡では韓式系土器が見つかっており、渡来系氏族に係わる集落が一時期営まれてものと考えられている。また、上沢遺跡、松野遺跡では大量の勾玉や白玉などの石製(模造)品が出土し、祭祀に関係する遺跡であることが解っている。

飛鳥～奈良時代

この時期になると、山陽道をはじめ幹線道路が整備され、それに併い駅屋などの施設が設置された。集落の形成も連動していたものと考えられる。

飛鳥～奈良時代の遺構を確認しているのは、大田町遺跡・二葉町遺跡・上沢遺跡・御歳遺跡・二宮遺跡などである。大田町遺跡は奈良～平安時代の整然と並んだ掘立柱建物や縁袖陶器・黒色土器などの遺物などが確認され、須磨駅家の推定地とされている。上沢遺跡では井戸型の井戸枠を用いる井戸と、それに併い銅鏡が出土した。いずれも平城京などの都城で確認されているもので、特に銅鏡は正倉院御物に入っているほどの名品である。のことから上沢遺跡も、官衙的な要素を有する遺跡であると考えられる。また、御歳遺跡からも奈良～平安時代の掘立柱建物が数多く検出された。縁袖陶器・三彩・瓦・鉄製鏡前・皇朝十二鏡などの遺物も出土し、現在想定されている山陽道からわずかに外れているが、ここにも官衙的な集落が営まれていたことが解っている。

中世

平安時代後半頃になると、ようやく大橋町遺跡で本格的に集落の形成が始まる。この頃国道2号線を挟んで南側の二葉町遺跡をはじめ多くの集落が形成されていた。二葉町遺跡では平安時代後期から鎌倉時代の数多くの掘立柱建物・井戸・墓などが発見され、特に井戸枠として使用されていた準構造船は当時の船舶の構造を知る上で重要な資料といえる。須磨区行幸町遺跡はやや新しく鎌倉時代から室町時代の集落で、多くの柱跡などとともに二基の墓が並んで確認され、その中からは良好な状態で人骨が確認された。兵庫区祇園遺跡や、同楠・荒田町遺跡は平家の屋敷跡で、園地や建物跡などが確認されている。兵庫区兵庫津遺跡は中世以降発展をつけ、江戸時代には多くの町屋を有する都市に成長を遂げた。

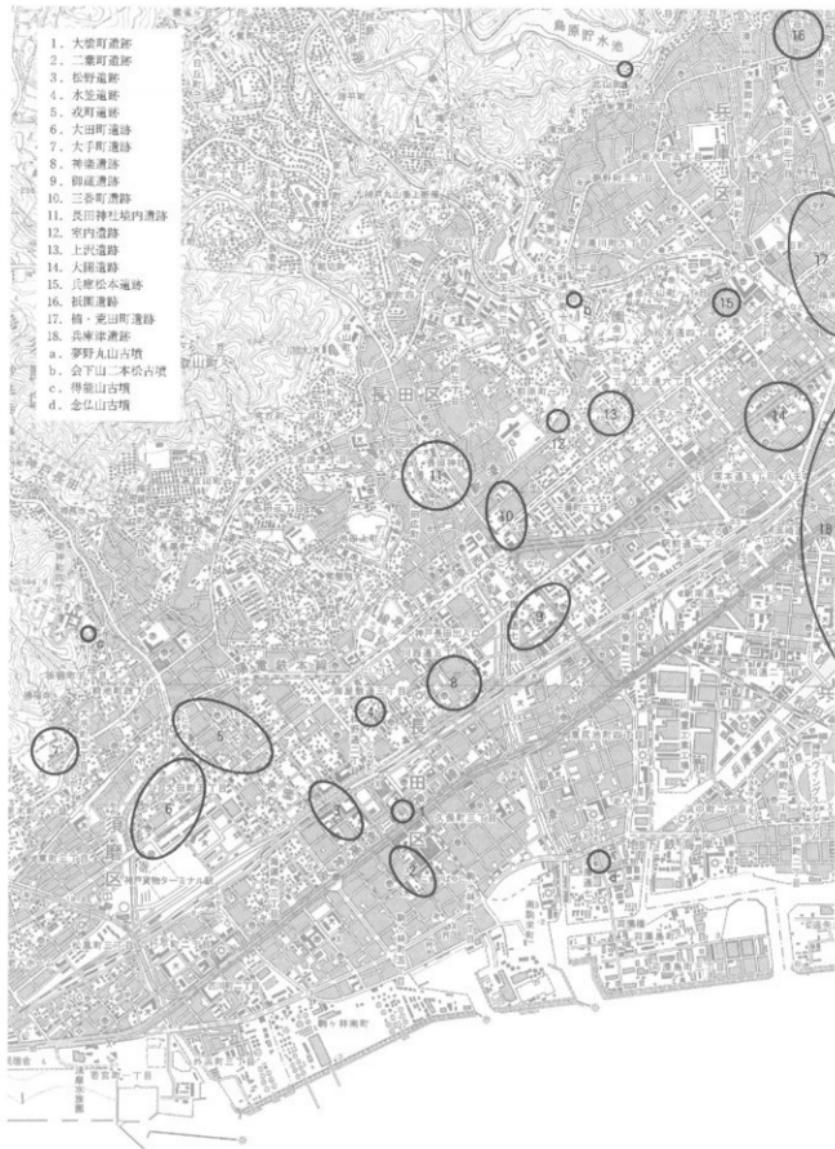


図2 周辺の主要遺跡(1:25,000)

(参考文献)

二宮遺跡

谷正俊「二宮遺跡第1次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001

石島三和「二宮遺跡発掘調査報告書—第2次調査—」神戸市教育委員会 2003

祇園遺跡

當山直人編「祇園遺跡第5次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000

大開遺跡

前田佳久編「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993

鎌田勉・友岡信彦「大開遺跡 第7次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999

関野豊「大開遺跡第9次調査」・須藤宏「大開遺跡第10次調査」「平成13年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2004

兵庫松本遺跡

松林宏典「兵庫松本遺跡第1次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001

中谷正編「兵庫松本遺跡第2～4・12・17・19次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2005

兵庫津遺跡

内藤俊哉「兵庫津遺跡第15次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001

黒田泰正「兵庫津遺跡第20次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002

上沢遺跡

口野博史・阿部敬生編「上沢遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1995

斎木巖・三輪晃三「上沢遺跡 第8次調査」・池田毅・井尻格「上沢遺跡 第9次調査」・斎木巖・奈良康正「上沢遺跡 第16次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2000

橋詰清孝・石島三和・中谷正「上沢遺跡 第32次-1」・橋詰清孝・石島三和「上沢遺跡 第32次-2」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002

口野博史・関野豊「上沢遺跡 第33次」「同上」

谷正俊編「上沢遺跡III 第38・46・50次調査」神戸市教育委員会 2004

夢野丸山古墳・得能山古墳・会下山二本松古墳・念仏山古墳

喜谷美宣「古墳時代 前方後円墳の成立と発展」「新修神戸市史 歴史編Ⅰ自然・考古」神戸市 1989

長田神社境内遺跡

黒田恭正編「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990

藤井太郎「長田神社境内遺跡 第10次調査」「平成9年度埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2000

御藏遺跡

- 山田清朝・山上雅弘『神戸市「御藏遺跡一第8・9・10次調査一」』神戸市教育委員会 2000
 安田滋・富山直人・石島三和編『御藏遺跡 第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
 安田滋編『御藏遺跡 第17・38次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
 富山直人・川上厚志編『御藏遺跡 第5・7・11~13・18~22・24・28・29・31・33~36・39・41・43次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003
 谷正俊編『御藏遺跡V 第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会 2003

二葉町遺跡

- 川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査』神戸市教育委員会 2001
 浅谷誠吾『二葉町遺跡第14次調査』『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
 阿部功『二葉町遺跡第14次調査』『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
 池田毅・石島三和・二葉町遺跡第15次調査』『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2003
 谷正俊・川上厚志『二葉町遺跡第16次調査』『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
 黒田泰正・石島三和・二葉町遺跡第17次調査』『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2006

松野遺跡

- 千種浩編『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1983
 口野博史編『松野遺跡発掘調査報告書 第3~7次調査』神戸市教育委員会 2001
 関野豊編『松野遺跡第11~23・25・26・29~31次 水笠遺跡第2・3・5~15・17~21次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002
 藤井太郎編『戎町遺跡第35・38・50・56次調査 松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2005

戎町遺跡

- 山本雅和編『戎町遺跡第1次調査概報』神戸市教育委員会 1989
 山本雅和・「戎町遺跡 第19次調査』『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
 山口英正『戎町遺跡 第15次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
 藤井太郎編『戎町遺跡第35・38・50・56次調査 松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2005

大手町遺跡

- 山本雅和・阿部敏生・中谷正『大手町遺跡第1~4次・6次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003

行幸町遺跡

- 西岡巧次・石島三和・阿部功『行幸町遺跡第1次調査』『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
 谷正俊・佐伯二郎『行幸町遺跡第2次調査』『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2003
 浅谷誠吾『行幸町遺跡第4次~2調査』『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2006

第3節 調査経過

1. 新長田駅南地区再開発と文化財

大橋町遺跡が存在する新長田駅南地区は、平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)により壊滅的な被害を受けた。特に国道2号線以南の腕塚町・久保町・二葉町などは、古くからの商店が軒を連ねており、人的にはもちろん經濟的にも大きな被害を被った。それを見て神戸市では震災前からのまちづくり計画をもとに、震災復興事業の一環として新長田駅前再開発事業を計画・実施した。

教育委員会文化財課は、事業対象地内において試掘調査を行い文化財の有無を確認した。その結果国道2号線より南側では主に古代・中世の集落である二葉町遺跡、北側には主に古墳時代の集落である松野遺跡が存在し、遺構・遺物が良好に残存していることが判明した。平成8年度から現在に至るまで調査を行なっており調査が終了した部分から順次再開発ビルが建設され、現在、それぞれのビルで被災店舗などが営業を始め、以前の活気を取り戻しつつある。

2. 大橋町遺跡の発見

一方、大橋町5丁目地区は既存の建物が多く、試掘調査が可能な部分が少なかったため、震災後の試掘調査では不明な点が多く再試掘の必要があった。その後、平成14年度の年度末に再度試掘調査を行い、平安時代～鎌倉時代の遺物包含層とピット・溝などの遺構が確認された。

遺跡の名称は遺跡が確認された地名から『大橋町遺跡』と命名された。

3. 現地調査の工程

平成16年度、さらなる範囲確定のため、平成16年4月30日・5月6日に西端部分の再試掘を行なった後、5月～11月上旬まで調査可能な地点から順に調査を行なった。

各調査地点・調査期間・調査面積は下表の通りである。

調査次数	調査期間	調査面積(m ²)
1次-1	平成16年5月12日～平成16年6月3日	145
1次-2	平成16年6月3日～平成16年6月29日	165
1次-3	平成16年6月28日～平成16年7月30日	175
1次-4	平成16年8月2日～平成16年9月3日	710
1次-5	平成16年9月1日～平成16年9月17日	245
1次-6	平成16年9月8日～平成16年11月5日	1080
調査面積合計		2520

表1
調査経過表

なお、5月30～6月3日には、兵庫県内の中学校の行事であるトライヤルウイーク(職場体験)のため、神戸市立櫛谷中学校から2名の生徒を受け入れ、発掘調査現場において包含層掘削・測量などの発掘体験を行なった。

また、8月26日には第1次-4調査地で空中写真測量を実施した。



図3 大橋町遺跡位置図



挿図写真1 空中写真撮影状況



挿図写真2 トライヤーの中学生
作業風景



図4 調査地地区割図

第4節 調査組織

平成16～17年度

神戸市文化財保護審議会(史跡・考古資料担当)

榎上 重光 前神戸女子短期大学教授

工渠 善通 大阪府立箕面山池博物館館長

和田 啓吾 立命館大学文学部教授

平成16年度(現地調査)

教育委員会事務局

教育長 小川 雄三

社会教育部長 高橋英比古

参考事 桑原 泰豊

(文化財課長事務取扱)

社会教育部主幹 宮本 郁夫

(埋蔵文化財センター所長事務取扱)

社会教育部主幹 渡辺 伸行

(埋蔵文化財指導係長事務取扱)

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明

文化財課主査 丸山 澤

同 菅本 宏明

事務担当学芸員 東 審代秀

保存科学担当学芸員 中村 大介

平成17年度(遺物整理・報告書作成)

教育委員会事務局

教育長 小川 雄三

社会教育部長 高橋英比古

参考事 桑原 泰豊

(文化財課長事務取扱)

社会教育部主幹 渡辺 伸行

(埋蔵文化財指導係長事務取扱)

社会教育部主幹 丸山 澤

(埋蔵文化財センター所長事務取扱)

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明

文化財課主査 菅本 宏明

同 安田 澤

事務担当学芸員 東 審代秀

保存科学担当学芸員 中村 大介

(財)神戸市体育協会

会長 矢田 立郎

副会長 矢野栄一郎

(専務理事事務取扱)

常務理事 野波 建作

総務課長 横間 勇

総務課主任(兼務) 菅本 宏明

調査担当学芸員 中谷 正

(財)神戸市体育協会

会長 家治川 豊

副会長 矢野栄一郎

(専務理事事務取扱)

常務理事 野波 建作

総務課長 横間 勇

総務課主任(兼務) 菅本 宏明

報告書担当学芸員 中谷 正

第2章 調査成果

第1節 基本層序

調査地は、先述の通り比較的古い段階で市街地化したため、一部擾乱が入る部分が存在するものの全体としては良好に遺物包含層・遺構面が存在していた。

埋土は、北部では後世の削平により遺物包含層が存在しなかった。そのため盛土・灰色砂質土(旧耕作土)・黄灰色粘質土(床土)の直下に遺構面を検出した。遺構面までの深さは現地表面下50cmほどで、さらに断ち割り調査により遺構面以下の堆積状況の確認を行なった。その結果、全体に洪水砂と考えられる粗砂・疊層を検出した。その中からわずかではあるがローリングを受けた弥生土器片が出土した。

一方、南部では、床土の直下に中世遺物包含層(暗灰～暗灰褐色シルト)を検出し、鉄溝などの遺構を確認した。さらに遺物包含層を除去すると、遺構面(黄灰色シルト質粗砂・淡灰黄色細砂)を検出し、掘立柱建物・井戸・墓・鉄溝などの遺構を良好な状態で検出した。しかし、調査地南端部では遺物包含層にはあまり遺物が含まれず、遺構も検出されなかった。さらに下層については砂層が厚く堆積している状況を確認している。

主に遺物包含層は南西部に良好に遺存していた。遺物包含層からは主に平安時代～鎌倉時代の黒色土器・土師器・須恵器の小片・鉄釘・鋏先・不明鉄製品が出土した。わずかではあるが弥生時代中期～後期の土器・石器も確認されており、周辺に弥生時代中期～後期の遺構が存在したものと考えられる。

	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	形態	出土箇所
a	18.26	13.24	3.30	0.7	平基式	遺物包含層
b	20.08	13.67	2.96	1.0	凹基式	S D1105下層
c	26.00	15.34	2.79	0.8	凹基式	遺物包含層
d	33.40	17.30	6.30	2.7	有茎式	S E105混入?

表2 出土石器一覧



図5 基本土層図

第2節 検出遺構

今回検出された遺構は、弥生時代・古墳時代の溝、飛鳥～中世の掘溝、平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・水溜・土坑・墓・落ち込み・溝・ピットである。

なお、現地調査は調査予定地の建物の除却と併行して調査を実施したため、都合6回に分けて調査した。今回の報告では重複する遺構も存在することや、記述が煩雑になることから、遺構ごとに記述することとする。各調査区の位置関係については、第1章第3節図4を参照いただきたい。

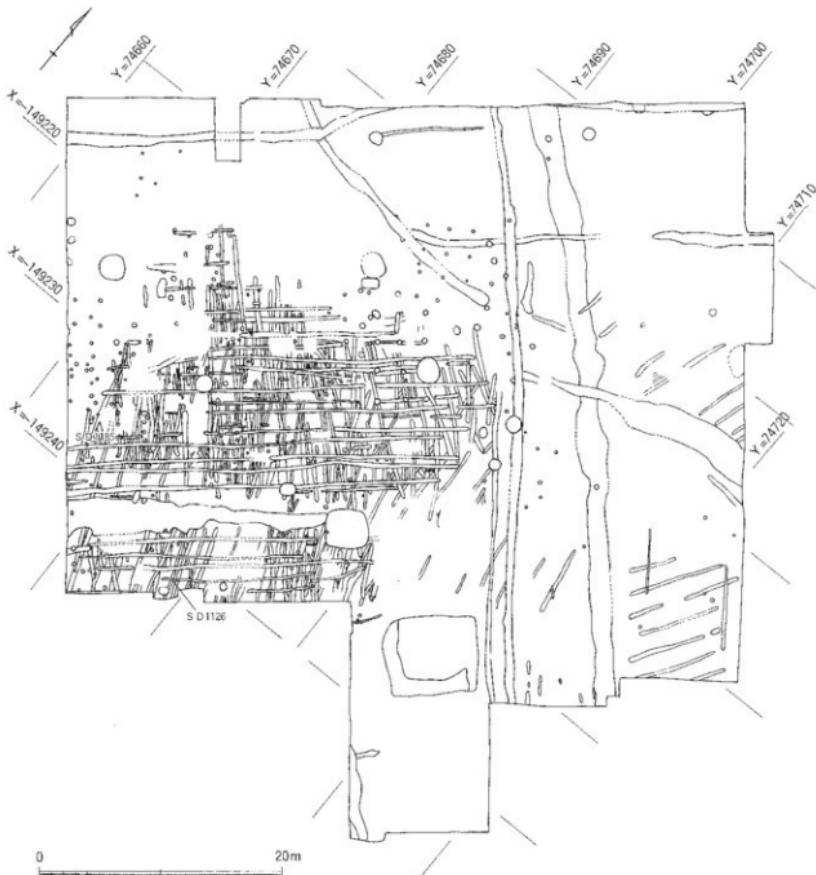


図6 調査地平面図

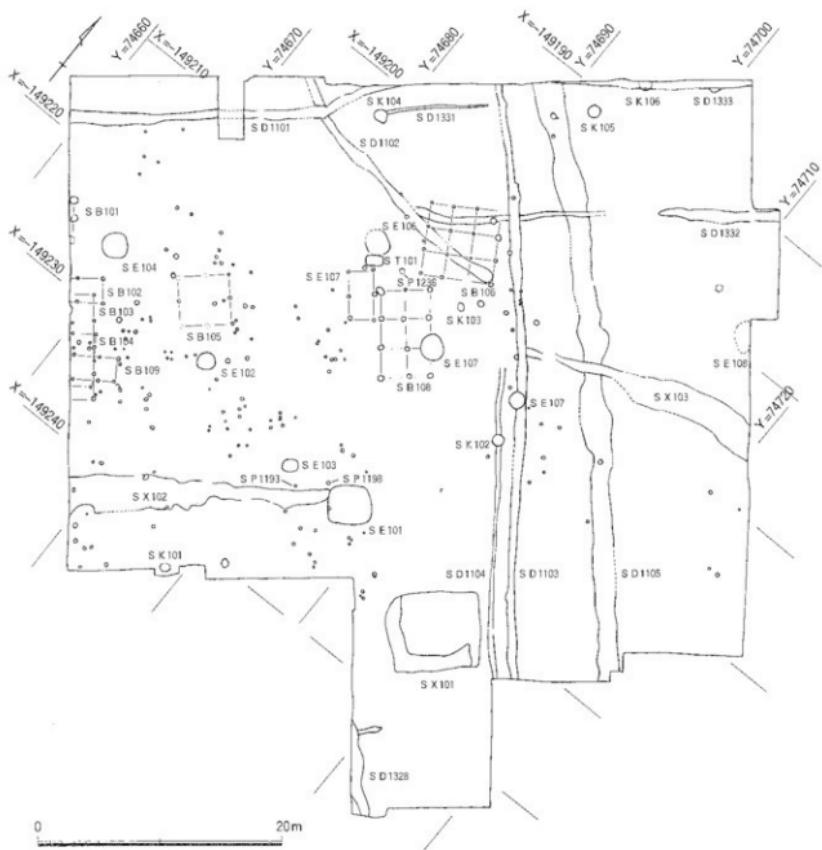


図7 調査地平面図(主要遺構)

1. 挖立柱建物

S B101

調査地西部で検出された掘立柱建物である。柱穴の掘形は直径60cm、深さ10~35cmで、柱痕の直径は20cm程度で、柱間は1.8mを測る。他の建物と比べ掘形が大きく特異な建物である。調査地西壁際で検出されており、2間の柵列状を呈する。調査地内で対応する柱穴が確認されなかったため、調査地外に延びるものと考えられる。建物の方向はN40°Wである。遺物は出土しなかったが、おそらく平安~鎌倉時代のものと考えられる。

S B102

調査地西部で検出された掘立柱建物で、 1×1 間以上、柱間は南北で2.0m、東西で2.1mを測る。柱穴の掘形は直径30cm前後、深さ約20cm、柱痕の直径は10cm前後を測る。建物の方向はN40°Wである。埋土は茶褐色～灰褐色細砂～シルト質極細砂で、遺物は出土しなかったが、おそらく平安～鎌倉時代のものと考えられる。

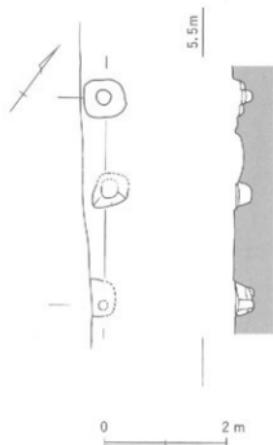


図8 S B101

S B103

調査地西部で検出された掘立柱建物で、柱間は2.1mで、南北4間分を検出した。調査地内には対応する柱穴が確認されず、調査地外に延びていたと考えられる。柱穴の掘形は直径30cm前後、深さ20～30cm、柱痕の直径は20cm前後を測る。埋土は主に灰褐色細砂が堆積していた。建物の方向はN40°Wである。遺物は出土しなかったが、おそらく平安～鎌倉時代のものと考えられる。

S B104

調査地西部で検出した掘立柱建物で、 2×1 間以上、柱間は南北で2.1m、東西で2.0mを測る。調査地外に延びる。柱穴の掘形は直径30cm前後、深さ約20cm、柱材は直径約15cmを測る。建物の方向はN40°Wである。埋土は灰色及び暗灰褐色シルト質細砂～極細砂で、P-4からは須恵器塊(1)が出土した。

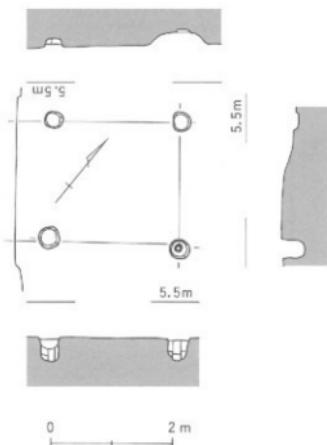


図9 S B102

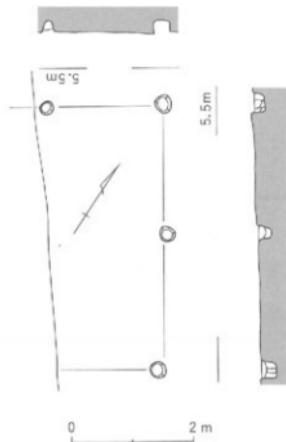


図10 S B104

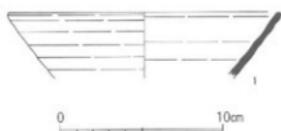


図11 S B104出土遺物

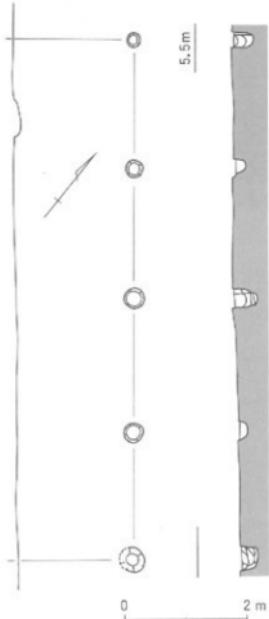


図12 S B103

1は須恵器塊で、口径16.6cm、残存器高4.1cmを測る。口縁部は底部から直線的に広がり、口縁端部はやや丸く仕上げられる。平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる。

S B105

調査地西部で検出された掘立柱建物で、 2×2 間、柱間は南北2.0mを測る。東西の柱間は搅乱のため不明であるが、約2.0mと考えられる。柱穴の掘形は直径30cm前後、深さ20cm前後、柱痕の直径は約15cmを測る。P-4から平安時代の土師器壺・土鍤が出土した。建物の方向はN40°Wである。

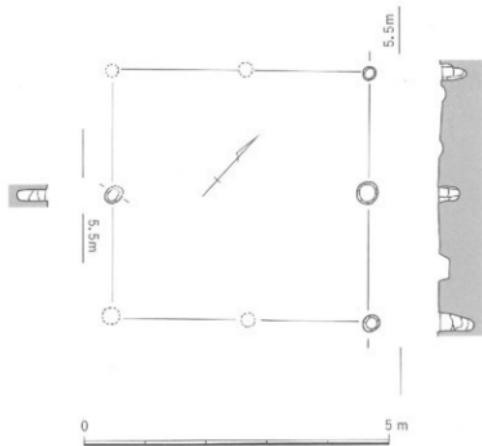


図13 S B105

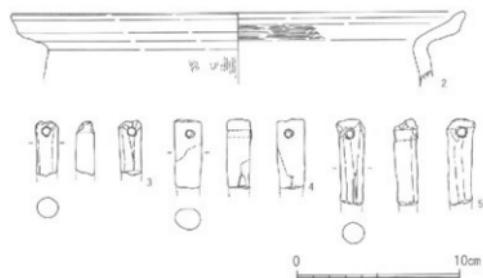


図14 S B105出土遺物

2は土師器壺で、口径27.6cm、残存器高4.0cmを測る。口縁部は大きく外方に開き、端部はわずかに外方につまり出す。口縁部内面はナデ・ハケで、体部外表面はハケで仕上げる。3～5は土鍤で、3は残存長4.2cm、直径1.7cm、4は残存長5.3cm、直径1.4cm、5は残存長3.35cm、直径1.3cmを測る。いずれも上部に直径5mm程度の孔を穿つ。なお、5は上端に直交するように孔が穿たれていた痕跡が認められる。平安

～鎌倉時代のものと考えられる。

S B106

調査地中央で検出された矩形建物で、 3×3 間、柱間は南北で1.9m、東西で1.9～2.0mを測る。柱穴の掘形は直径30cm前後、深さ20～30cm前後、P-14の埋土上層から黒色土器塊(6)が出土した。柱穴の埋土は暗灰色・灰褐色・茶灰色のシルト質細砂および粗砂である。他の建物と異なり建物の方向はN30°Wである。

6は黒色土器塊で、底部のみが残存していた。やや外方に開く低い高台を貼り付ける。内面は黒色で、黒色土器A類である。平安時代のものと考えられる。



図15 S B106出土遺物



拝図写真3 S B106 P-14遺物出土状況(南から)

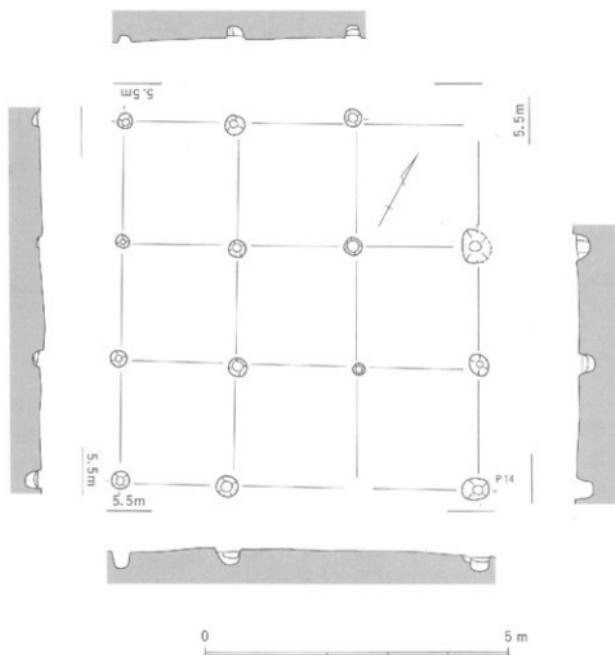


図16 S B106

S B 107

調査地中央で検出された掘立柱建物で、2×1間、柱間は2.0mを測る。柱穴の掘形は直径30cm、深さ40~50cmを、柱痕は直徑約20cmを測る。埋土は暗灰~灰褐色シルト質極細砂で、土師器小片が出土した。建物の方向はN40°Wである。おそらく鎌倉時代前後のものと考えられる。

S B 108

調査地中央で検出された矩柱建物で、3×2間、柱間は南北で2.1~2.4m、東西で2.0mを測る。柱穴の掘形は直径30~60cm、深さ40cm前後、柱痕は直徑20cmを測る。埋土は主に暗灰色細砂・灰茶褐色砂質土で、遺物は出土しなかった。P-5には直径10cm、長さ20cm程度の柱材が残存していたが、遺存状態は

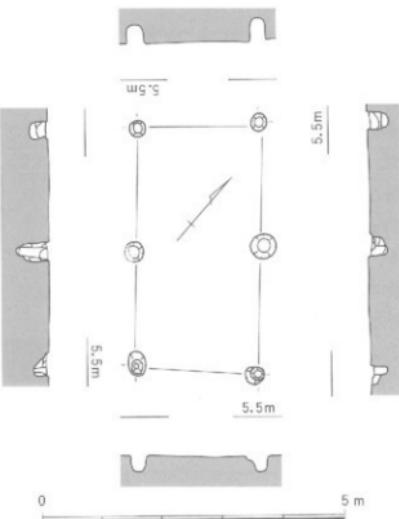


図17 S B 107

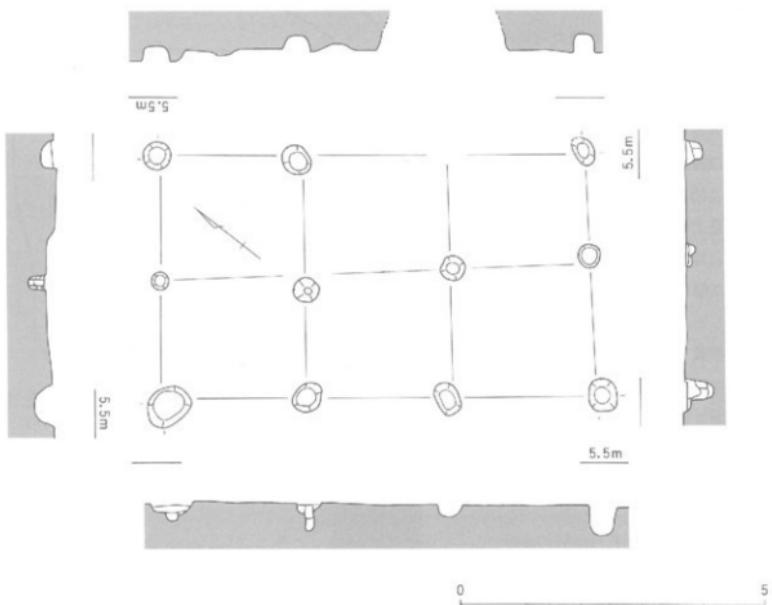


図18 S B 108

良好ではない。建物の方向はN40°Wである。鎌倉時代前後のものと考えられる。

S B 109

調査地西部で検出された掘立柱建物で、 1×2 間以上、柱間は2.1mを測る。柱穴の楕円形は直径30cm、深さ20cm前後、柱痕は直径15cm前後を測る。埋土は主に灰褐色シルト質細砂で、土師器(7)が出土した。建物の方向はN40°Wである。

7は土師小皿で、口径8.2cm、器高1.6cmを測る。口縁端部は外方につまみ出される。平安時代末～鎌倉時代のものと考えられる。

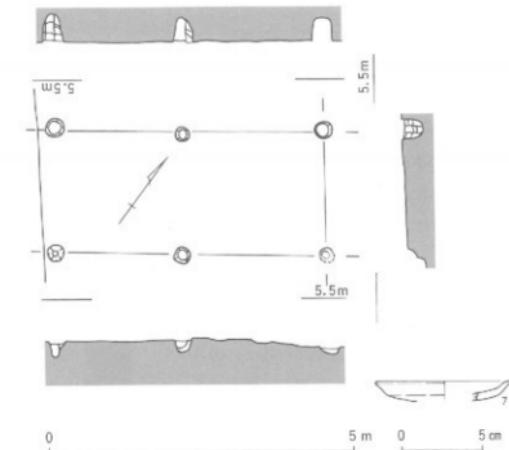


図19 S B 109・出土遺物

2. 井戸

S E 101

調査地中央で検出された隅丸方形の井戸で、東西3.5m、南北3.0m、深さ1.1mを測る。上層では隅丸方形、下層では円形を呈する。底面は平坦で、曲物などを据え置いた状況は確認されなかった。最上層を除いては人為的に埋め戻されたような状況であった。最上層には暗茶灰色砂質土が浅く、上～中層には暗茶灰色シルト～シルト質極細砂が、下層には黒灰色シルトと黄灰色シルトが混じった状態で堆積する。その直下の黒灰色砂質シルトが湧水層と考えられる。埋土からは、土師器が少量出土するのみで、正確な時期は不明である。近世陶磁器などの遺物が出土していないため、中世のものと考えられる。

S E 102

調査地西部で検出された円形の井戸で、直径1.4m、深さ90cmを測る。上層から中層では黒灰色砂混じりシルトが、下層では乳青灰色細砂～シルト質極細砂が堆積する。

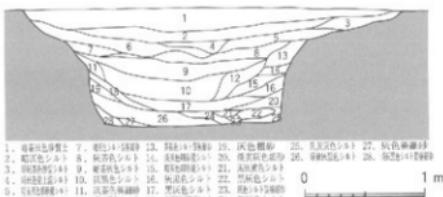
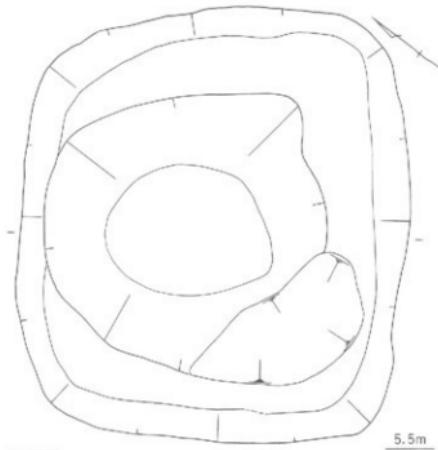


図20 S E 101

その堆積状態から、一時期に埋め立てられたものと考えられる。遺物は出土しなかったが、鋤溝など他の遺構の上から掘削されている点から、中世以降のものと考えられる。

S E 103

調査地中央で検出された橢円形の井戸で、長径1.3m、短径1.0m、深さ80cmを測る。上層～中層は暗灰色シルト質細砂(黒灰色シルトがブロックで混じる)が、下層には黒灰色シルト(黄灰色シルトが混じる)が堆積し、一時期に埋められたものと考えられる。遺物は出土しなかったが、すべての方向の鋤溝の上から掘削されているため中世以降のものと考えられる。

S E 104

調査地西部で検出された円形の井戸で、直径2.3m、深さ1.15mを測る。上層は井戸枠の抜き取り痕跡が認められる。下層には井戸枠に使用した曲物の痕跡を検出した。曲物の直径は約1m、高さ20cmを測る。埋土からは土師器(8～17)・須恵器(19～24)・白磁(18)が出土した。8～15は土師皿で、8は口径8.8cm、器高1.4cmを測る。口縁部は平坦な底部から短く外方に開く。9は口径9.6cm、器高1.8cmを測る。口縁部は底部との境界に明瞭な屈曲を持ち、やや外方に立ち上がる。10は口径9.6cm、器高2.0cmを測る。口縁部は底部との境界に稜線が見られ、口縁端部はわずかに上方に立ち上がる。11は口径9.2cm、器高1.3cmを測る。比較的平坦とした底部から大きく開きながら口縁部がナデにより作り出される。12は口径9.6cm、器高2.1cmを測る。底部はやや尖り底氣味で、口縁部は直線的に外方に開く。外面にはユビオサエ痕跡がわずかに残る。13は口径10.2cm、器高1.5cmを測る。口縁部はわずかに稜線をもって短く立ち上がる。14は口径9.6cm、器高2.0cmを測る。底部と口縁部の境界はあま

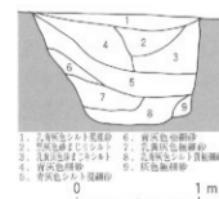
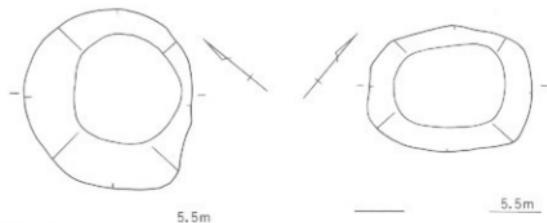
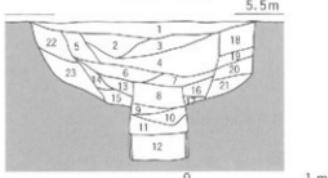
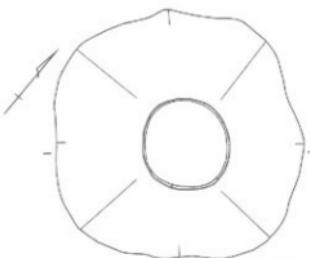


図21 S E 102

1. 黒灰色シルト混細砂
2. 黒灰色砂混細砂
3. 淡黒灰色砂質シルト
4. 暗灰黑色シルト混細砂

0 1 m

図22 S E 103



1. 淡灰色細砂
2. 淡灰黑色細砂
3. 深灰黑色シルト質細砂
4. 深灰黑色シルト質細砂
5. 深灰黑色シルト質細砂
6. 深灰黑色シルト質細砂
7. 深灰黑色シルト質細砂
8. 深灰黑色シルト質細砂
9. 深灰黑色シルト質細砂
10. 深灰黑色シルト質細砂
11. 深灰黑色シルト質細砂
12. 深灰黑色シルト質細砂
13. 深灰黑色シルト質細砂
14. 深灰黑色シルト質細砂
15. 深灰黑色シルト質細砂
16. 深灰黑色シルト質細砂
17. 深灰黑色シルト質細砂
18. 深灰黑色シルト質細砂
19. 深灰黑色シルト質細砂
20. 深灰黑色シルト質細砂
21. 深灰黑色シルト質細砂
22. 深灰黑色シルト質細砂
23. 深灰黑色シルト質細砂
24. 深灰黑色シルト質細砂

図23 S E 104

り明瞭ではなく、口縁端部がわずかに外方に開く。15は9.0cm、器高2.0cmを測る。他と比べ器壁が厚い。

16・17は土師器の皿で、16は口径15.6cm、器高2.3cmを測る。口縁部は広く平坦な底部から緩やかに外方に開く。17は口径14.5cm、残存器高3.3cmを測る。口縁端部はナデにより外方に開く。他のものよりも身深で、やや丸みのある体部をもつ。

19~24は須恵器碗で、19は口径17.2cm、残存器高2.7cmを測る。体部は強いナデを施し、口縁端部は丸く仕上げる。20は口径15.0cm、器高5.0cmを測る。体部からやや内湾しながら立ち上がる。底部内面には見込みには明瞭な凹みが見られる。21は口径16.4cm、器高4.2cm、底径6.6cmを測る。見込みにはしっかりとした凹みが見られ、ナデにより口縁端部はわずかに外方に開く。22は口径16.0cm、器高5.4cmを測る。欠損しているため不明瞭であるが、見込みの凹みが見られない。器壁は底部から口縁端部に上がるにしたがい薄くなる。23は口径17.4cm、器高5.05cmを測る。見込みにはわずかに凹みが見られるのみである。体部内面には黒色の付着物が見られる。24は口径16.2cm、器高5.4cm、底径5.4cmを測る。見込みはわずかに凹み、体部は内湾しながら大きく外方に開く。口縁端部には強いナデが施される。器形は比較的扁平で、底部に比べ体部の器壁は厚い。

18は白磁碗で、口径14.6cm、残存器高4.1cmを測る。体部は直線的に外方に広がり、口縁端部は玉縁状を呈する。外面には気泡が多く見られる。形状からIV-1形式に分類される⁽¹⁾。

出土遺物から平安時代末~鎌倉時代のものと考えられる。

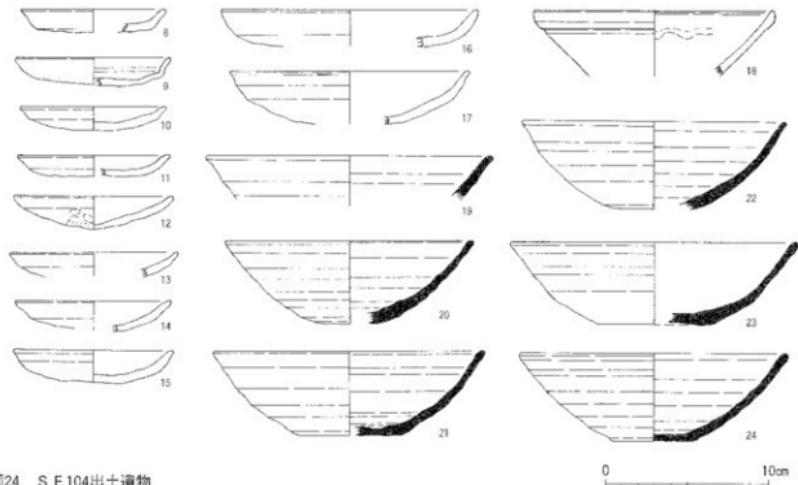


図24 SE 104出土遺物

0 10cm

S E 105

調査地中央で検出された円形の井戸で、直径2.0m、深さ1.3mを測る。灰褐色・暗灰色・黄灰色のシルト~細砂が混じて堆積する。底部で曲物などは確認されなかった。埋土からは土師器・須恵器・染付・青磁の小片が出土した。出土遺物から江戸時代頃のものと考えられる。

S E 106

調査地中央で検出された円形の井戸で、直径2.0m、深さ90cmを測る。上層で灰色粗砂~細砂(黄白色シル

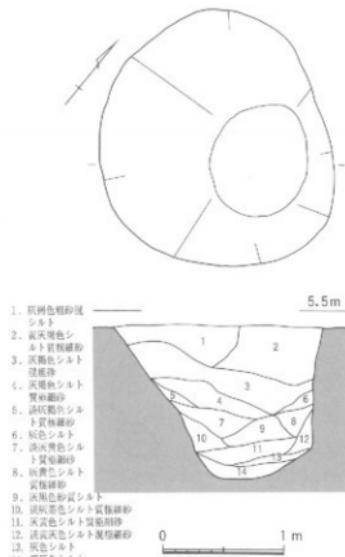


図25 S E 105

トがブロックで混じる)が、下層で茶灰細砂～中砂が堆積する。底面は比較的広く、平坦である。埋土から土師器・須恵器の小片が出土した。出土遺物から鎌倉時代頃のものと考えられる。

S E 107

調査地中央でS D 1103を切って検出された円形の井戸で、直径1.2m、深さ1.0mを測る。上層では灰褐色シルト(黄色粘土が混じる)が、中層から下層にかけては暗灰色～黒灰色のシルトが堆積する。他の井戸と比較すると、壁面は垂直に立ちあがる。埋土からは土師器・須恵器の小片が出土した。出土遺物などから鎌倉時代以降のものと考えられる。

S E 108

調査地東部で検出された円形の井戸で、推定直径1.6m、深さ1.0m以上を測る。掘削途中で造構壁面の崩壊があったため、造構の正確な規模は不明である。灰色粘土(黄灰色粗砂が混じる)が堆積する。

挿図写真4 S E 108掘削状況(西から)

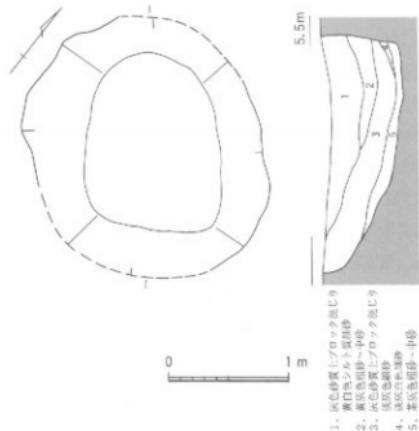


図26 S E 106

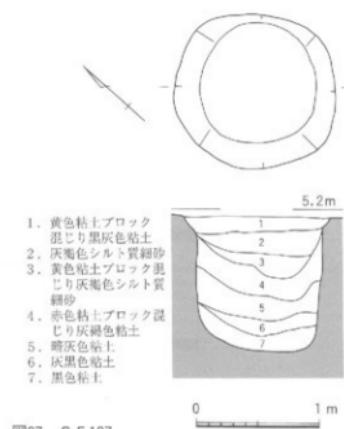


図27 S E 107



3. 土坑

S K101

調査地南西部で検出された楕円形の土坑で、長径80cm、短径60cm程度、深さ25cmを測る。底部は直径20cmほどの凹む。埋土は暗灰色砂質シルト～粘土で、遺物は出土しなかった。切り合ひ関係から時期は飛鳥時代以降のものと考えられる。

S K102

調査地中央で検出した円形の土坑である。長径90cm、短径80cm、深さ70cmを測る。底部北側は狭いテラスを形成し、中位ではオーバーハンプする状況で検出された。埋土は上層で淡オリーブ色シルト質細砂、下層で暗灰色シルトが堆積する。底面からわずかに浮いた状態で須恵器塊(26)が出土した。

25は須恵器塊で、口径15.6cm、器高5.6cm、底径4.6cmを測る。見込みは凹み、底部外面の境界は存在するが、不明瞭である。口縁部は強いナデにより外方開く。26は須恵器塊で、口径16.5cm、器高5.1cmを測る。見込みはわずかに凹み、体部へ口縁部にかけてほぼ直線的に外方に開く。口縁端部はナデによりわずかに外方に開く。

出土遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭ものと考えられる。

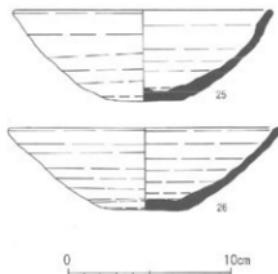


図30 S K102出土遺物

S K103

調査地中央で検出した円形の土坑で、直径65cm、深さ40cmを測る。埋土は上層で茶灰～灰褐色シルト質細砂が、下層で暗灰色シルト質細砂・砂質シルトが堆積し、遺物は出土しなかった。

S K104

調査地中央で検出された円形の土坑で、直径1.0m、深さ25cmを測る。埋土は暗灰色・灰褐色粘質土～砂質シルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

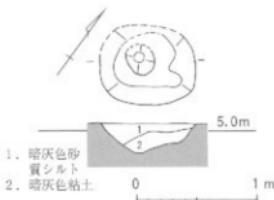


図28 S K101

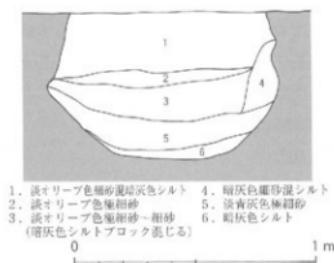
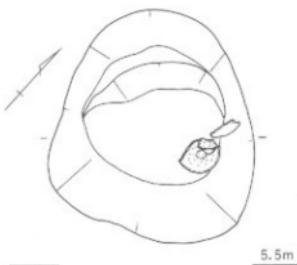


図29 S K102

S K 105

調査地中央北で検出された円形の土坑で、直径1.0m、深さ50cmを測る。埋土は上層では淡灰黄茶色シルト質極細砂が、下層では青灰色シルト質極細砂が堆積する。遺物は出土しなかった。

S K 106

調査地北東部で検出された遺構で、形状はおそらく円形であると考えられる。底部には直径40cmほどの凹みをもつ。埋土は主に暗灰茶色砂質シルトで、下層に灰黒色粘土がわずかに堆積する。遺物は出土しなかった。断面観察から S D 1333より後に掘削されたものと考えられる。

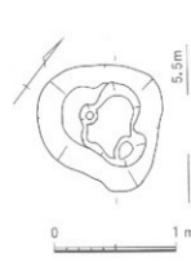


図32 S K 104

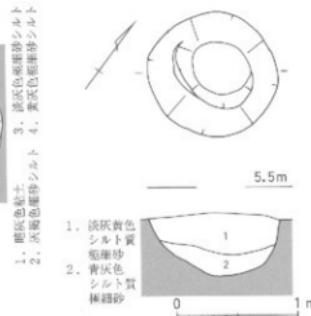


図33 S K 105

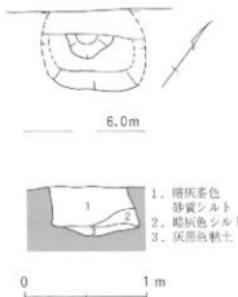


図34 S K 106

4. 墓

S T 101

調査地中央で検出された長方形の土坑墓で、掘形は長辺1.4m、短辺70cm、深さ35cmを測る。東端で土師皿3点(27~29)・須恵器塊1点(30)が出土した。同じ場所で歯片が数点出土しており、北東頭位の墓である。

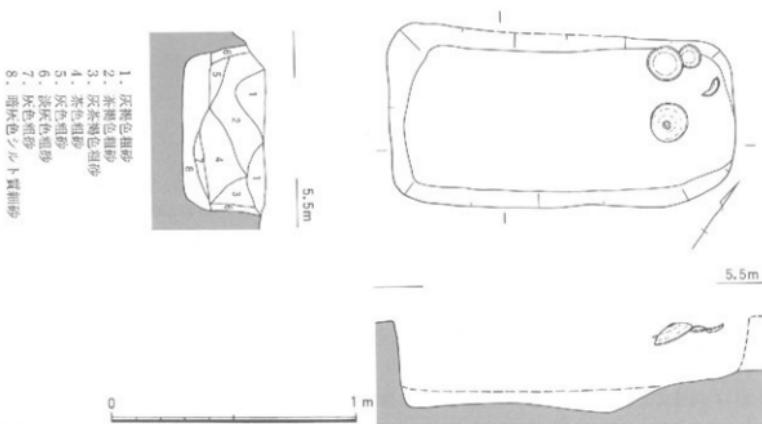


図35 S T 101

ることが判明した。また、断面形は箱形で、断面では板状の痕跡が確認されるため、木棺が収められていた可能性があるが、不明な点が多く今回の報告では土坑墓とする。遺物は床面からかなり浮いた状態で出土した。S B107・S B108に隣接して検出されたことから、屋敷墓であると考えられる。

27は土師器小皿で、口径9.75cm、器高1.35cmを測る。底部と体部の境界は不明瞭である。かなり浅い器形である。28は土師器小皿で、口径8.8cm、器高1.4cmを測る。27とはほぼ同形で、こちらの方がわずかに小ぶりである。29は土師器皿で、口径15.2cm、器高1.2cmを測る。底部外面にはヘラ切り痕跡が明瞭に残存する。体部中位に大きなナデを施し、口縁部を作り出す。30は須恵器塊で、口径15.8cm、器高4.8cm、底径5.7cmを測る。見込みには明瞭に凹みがあり、体部は器壁が厚く、やや内湾気味に上方に向く。

出土遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる。

5. 水溜状遺構

S X101

調査地中央南で検出された長方形の大型の土坑で、東西長7.8m、南北長6.0m、深さ60cmを測る。西・南辺部には盛土で、L字状に幅1.5mの土手状の高まりを設ける。同様の遺構は二葉町遺跡に数基検出されており、中には取水用と考えられる桶が据え付けられている例もあり、水溜状遺構と考えられている。この遺構も形状の類似性から同様のものと考えられる。盛土は北西～東へ向けて徐々に下がるように作られており、通路として使用されていたものと考えられる。また、床面は比較的平坦であるが、取水部分と考えられる東側では不整形に凹む箇所が存在する。埋土は暗灰色シルト・灰褐色砂質土・灰(褐)色シルト・黄灰色シルトが混じりあって堆積する。土師器・須恵器が出土した。遺物が小片であるため、正確な時期は不明であるが、二葉町遺跡の例などから判断すると、中世～近世のものと考えられる。

6. 落ち込み

S X102

調査地中央南で検出された溝状の落ち込みで、検出長21.0m、幅1.0～3.0m、深さ10～15cmを測る。埋土は暗灰色シルト(灰色粗砂混じる)が堆積する。弥生土器・土師器・須恵器・土鍬・鉄製鋤先・軸が出土した。底面には偶蹄目と考えられる足跡が検出された。湿地状の地形であったと考えられる。

出土遺物は小片が多く時期の判別が困難であるが、飛鳥時代の鋤轍と切り合っていることや、平安時代の

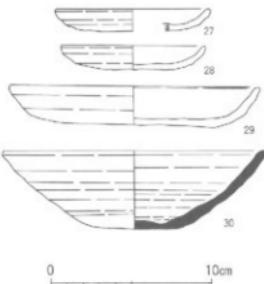
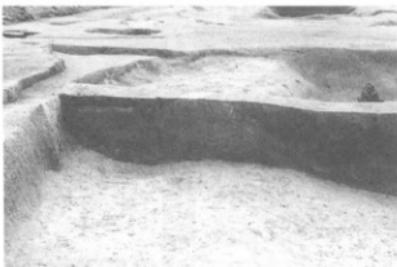
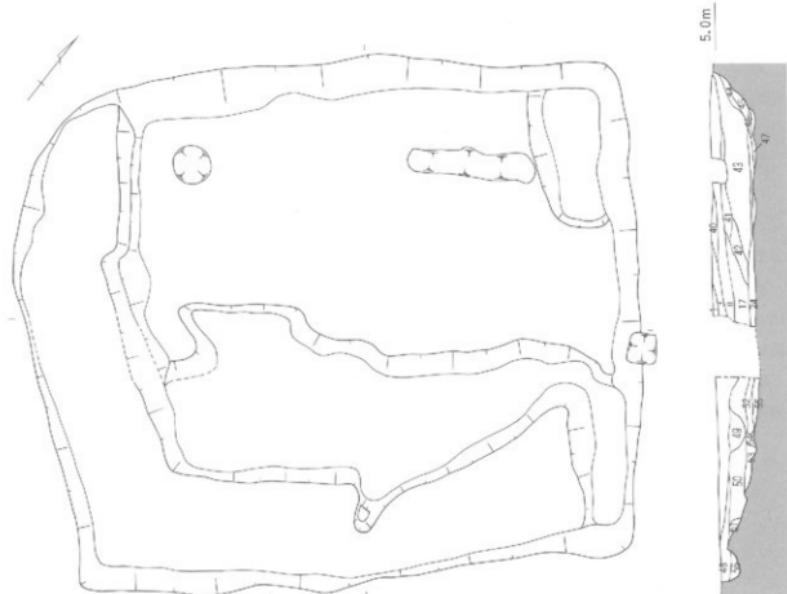


図36 S T 101出土遺物



挿図写真5 S X101盛土断面(南東から)



1. 底灰色砂質土
(底黒色シルトブロックわずかに含む)
2. 底褐色砂質土
(底黒色シルトブロック、小礁を多く含む)
3. 底褐色砂質土
(底黒色シルトブロック、小礁を多く含む)
4. 底褐色砂質土
(底褐色シルト)
5. 底褐色シルト質細砂
6. 底褐色シルト質粗砂
(底黒色シルトブロックを多く含む)
7. 底褐色シルト質粗砂
(底黒色シルトブロックを多く含む)
8. 底褐色シルト質細砂
(暗褐色シルトブロックを含む)
9. 底色細砂、シルト質土
(底褐色シルト、暗褐色、暗灰色シルトブロックを含む)
10. 底褐色砂質土
(底褐色シルト)
11. 底褐色シルト質細砂
12. 底褐色質土
(底黒色シルトブロックを含む)
13. 深灰色シルト質細砂
(暗褐色シルトブロックを含む)
14. 底褐色シルト質細砂
15. 底褐色シルト質粗砂
(底褐色シルトブロックを含む)
16. 底褐色シルト質粗砂
(底褐色シルトブロックを含む)
17. 底褐色シルト質粗砂
(暗褐色シルトブロックを少量含む)
18. 底色シルト質細砂
(暗褐色シルトブロックを少額含む)
19. 底褐色砂質土
(底褐色シルトブロックを含む)
20. 底褐色シルト質細砂
(底黒色、底黃色シルトブロックを多く含む)
21. 底褐色シルト質細砂
(底褐色シルト)
22. 底褐色シルト質細砂
(底褐色シルト)
23. 底褐色粘土
(底褐色シルト)
24. 底色粘土
(底褐色シルト)
25. 底色粘土
(底褐色シルト)
26. 淡灰質色シルト
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
27. 淡灰質色シルト質細砂
(底褐色シルトを含む)
28. 淡灰質色シルト
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
29. 淡灰褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
30. 淡灰褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
31. 淡灰褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
32. 淡灰褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
33. 淡灰褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
34. 淡灰褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
35. 淡灰褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底黒色シルトを含む))
36. 淡灰褐色砂質シルト
(底褐色砂質シルト)
37. 底褐色シルト
(底褐色シルト)
38. 底褐色粘土
(底褐色シルトブロックを少額含む)
39. 底褐色シルト質細砂
(底褐色シルト)
40. 底褐色砂質土
(底褐色シルト)
41. 底褐色シルト質細砂
(暗褐色シルトブロックを少額含む)
42. 底褐色シルト質細砂
(底褐色シルト質細砂層 (底褐色砂質土を少量含む))
43. 底褐色シルト質細砂
(底褐色シルト)
44. 底色細砂
(底褐色シルト)
45. 霧灰色茶褐色シルト
(底褐色細砂を含む)
46. 底褐色砂質土
(底褐色シルト)
47. 底褐色シルト
(底褐色シルトブロックを含む)
48. 底褐色砂質土
(底褐色シルト)
49. 底褐色砂質土
(底褐色シルト)
50. 淡灰褐色シルト質細砂
(暗褐色シルトブロックを多量に含む)
51. 淡灰褐色細砂
(底褐色シルト)
52. 底褐色シルト質細砂
(暗褐色シルトブロックを多量に含む)
53. 底褐色シルト
(底褐色砂質土を含む)
54. 淡灰褐色砂質細砂
(底褐色砂質土)
55. 淡灰褐色シルト
(底白色細砂を少額含む)
56. 淡灰褐色粘土
(底白色細砂を少額含む)

図37 S X101

鉤溝と並行して存在することなどから、平安時代以降ものと考えられる。

S X103

調査地西部で検出された溝状の落ち込みで、検出長20.0m、幅0.6~3.0m、深さ5~10cmを測る。埋土は暗灰色シルト(灰色粗砂混じる)が堆積する。底面には偶蹄目と考えられる足跡が数多く検出された。S X102同様、湿地状の地形であったと考えられる。埋土からは土師器の小片は出土した。

S D1105の上層から掘削されており、古墳時代以降のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

7. 溝

S D1101

調査地北部で検出された検出長25.0m、幅0.4~1.0m、深さ20cm前後の東西方向の溝である。溝の底部には、鉤痕跡と考えられる凹凸が見られる。西端からS D1102と交差する地点までは現在の地割と平行して直線的に検出されたが、それより以東は大きく北へ向けて屈曲する。

埋土は、およそ3層に分けられ、レンズ状に堆積する。断面により南から北に堆積する様子が観察できた。須恵器・土師器などと共に、黒色土器塊(33)が1点出土した。

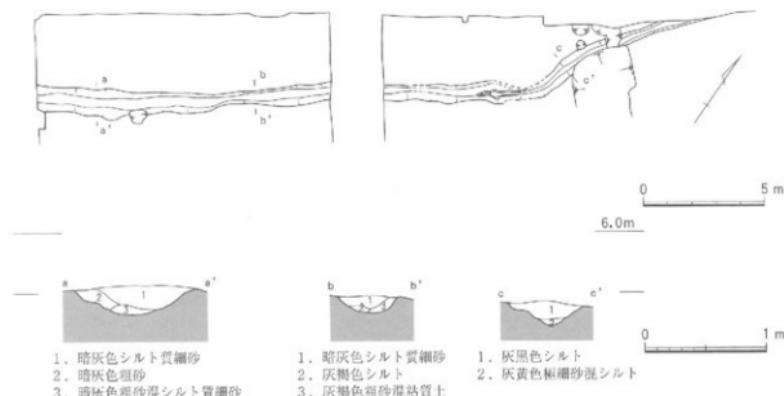
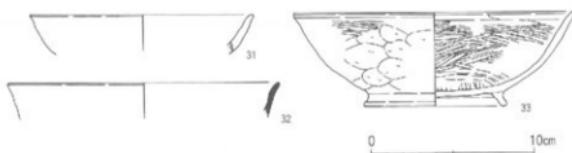


図38 S D1101

31は土師器壺と考えられ、口径13.6cmを測る。口縁端部はナデによりわずかにつまみ出される。32は須恵器壺と考えられ、口径17.2cmを測る。体部はまっすぐ上方に立ち上がり、口縁端部はわずかに外方に開く。33は黒色土器で口径17.2cm、器高5.75cm、底径8.6cmを測る。底部にはやや外方に踏ん張った高台が付けられ、体部はやや内湾気味に上方に広がり口縁端部はわずかに外方につまみ出され、面取りが施される。体部外面は口縁付近にヘラミガキが見られるが、大半は粗いヘラケヅリが施される。一

図39 S D1101出土遺物



方内面は丁寧にヘラミガキが施され、光沢のある黒色に仕上げられる。暗文などは施されていない。出土遺物から平安時代中期のものと考えられる。

S D 1102

調査地北部で検出された検出長約15.0m、幅0.4~0.7m、深さ10cmの溝である。方向は他の溝と異なり、磁北方向に直交する。非常に浅い造構で、暗灰色砂質シルト～細砂が堆積する。埋土から土師器・須恵器片の小片がわずかに出土するのみである。S D 1101により削平を受けているため、平安時代後期以前の造構と考えられる。

S D 1103

調査地中央で検出された検出長39.0m、幅0.4m前後、深さ25~35cmの北西～南東方向の直線的な溝である。断面形はU字～崩れたV字形で、灰褐色シルト～シルト質極細砂が堆積する。土師器(36)・須恵器(34・35・37)・砾石(38)が出土した。区画溝のようなものと考えられる。

34は須恵器甕の口縁部で、口縁端部は内面に折り返す。35は須恵器の底部で短い脚部が外方に突っ張るように付く。37は須恵器塊で、見込みは大きく凹み、底部外面には体部との境界が明瞭に残存する。36は土師器皿と考えら

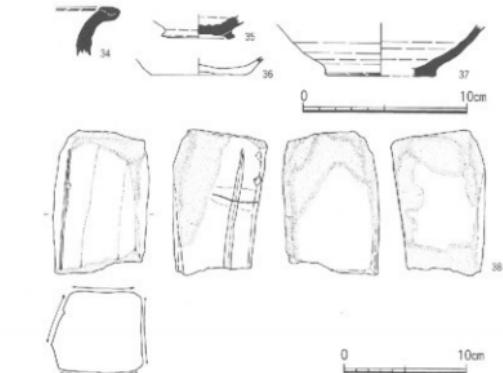


図40 S D 1103出土遺物

れる。38は砾石で、4面に磨面を有しそのうち1面には大きな創痕が残存する。重量は1,169g、比重2.51で、石材は砂岩と考えられる。出土遺物から鎌倉時代前後のものと考えられる。

S D 1104

調査地中央で検出された検出長25.0m、幅40cm、深さ10~20cmの北西～南東方向の直線的な溝である。断面形は皿形・U字形で、S D 1103と同様に灰褐色シルト～シルト質極細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。出土遺物から鎌倉時代頃のものと考えられる。

S D 1105

調査地中央で検出した検出長39.0m、幅1.5~2.5m、深さ40~60cmの北西～南東方向の溝である。埋土は



挿図写真6 S D 1105遺物出土状況1(43)(南西から)



挿図写真7 S D 1105遺物出土状況2(42)(西から)

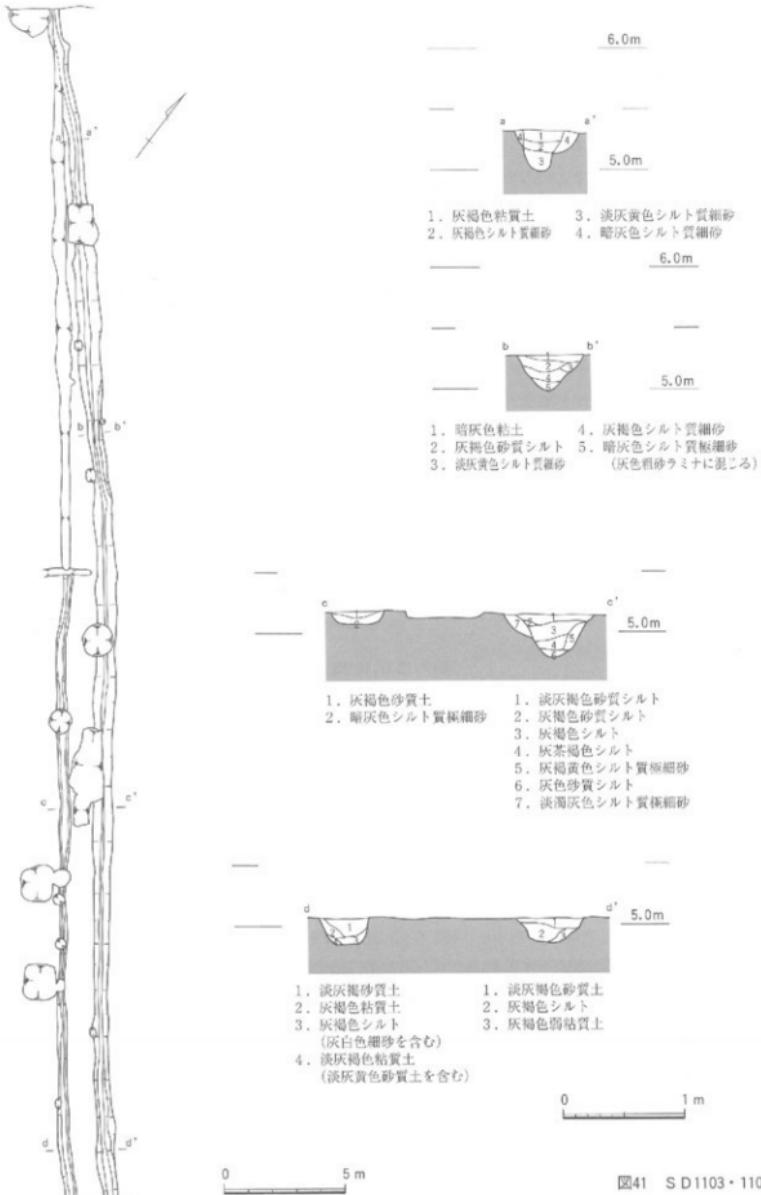


図41 SD 1103・1104

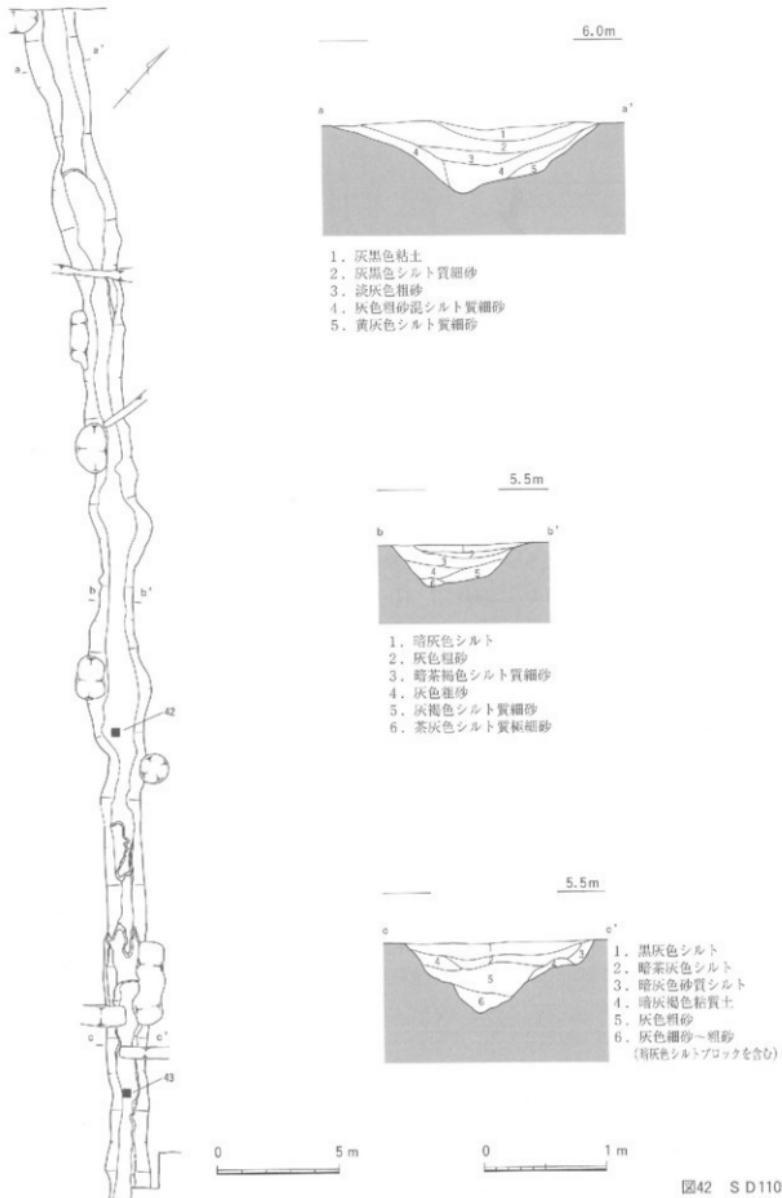


図42 SD 1105

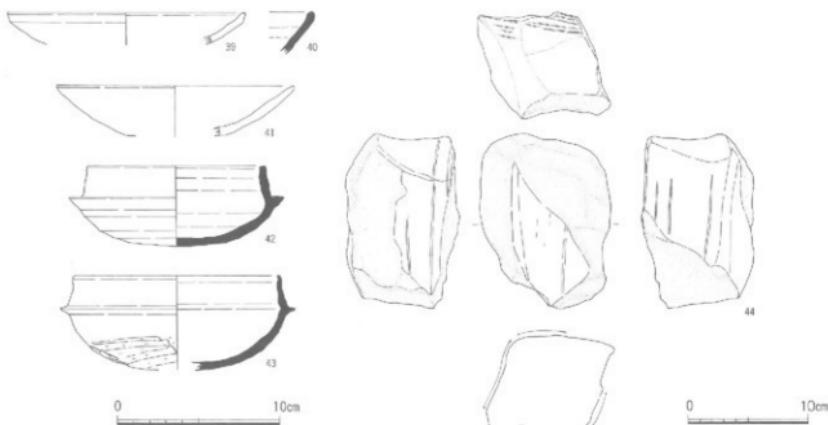


図43 S D 1105出土遺物

上層では暗灰色・黒灰色シルト～粘土が、下層では暗灰色シルト及び灰色細砂～粗砂が堆積する。中層～下層にかけては砂層が堆積しており、溝の開削期にはある程度の水流があったものと考えられるが、溝がある程度埋没した段階で、湿地状になっていたものと考えられる。断面形は南部ではV字形であるが、中央～北部では形状が一定しない。埋土から土師器(39・41)・須恵器(40・42・43)・砥石(44)が出土した。

39・40はいずれも埋土の最上層から出土したもので、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる。41は土師器高杯の壊部で、口縁部は体部から直線的に大きく外方に延びる。境界は極めて不明瞭である。42は須恵器壊身で、口径10.8cm、器高5.8cmを測る。口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。体部は扁平で、寸詰まりの形状である。43は須恵器壊身で、口径12.5cm、器高5.8cmを測る。口縁端部はツマミにより鈎の手状に仕上られ、かえりはほぼ水平に外方に張り出し、体部は丸みを帯びる。体部外面は手持ちのハラケズリにより仕上げる。44は砥石で、風化が激しく辛うじて4面に磨面が残存する。すべての磨面には細かい創痕が残存する。上部の磨面は大きく窪んでいる。重量1,588g、比重2.39、石材は砂岩と考えられる。出土遺物から古墳時代後期のものと考えられる。

S D 1328

調査地中央南で検出された検出長8.0m、幅1.0m以上、深さ15cmの東西方向の溝である。枝状に幅20cm程度の溝が北方向に延びる部分がある。埋土は暗灰茶褐色シルト質板細砂で、遺物は出土しなかった。遺物包含層の下層で検出されており、鎌倉時代以前のものと考えられる。

S D 1332

調査地北部で検出された検出長30.0m、幅0.2～1.0m、深さ15cmの南西～北東方向の溝である。断面形は浅い皿形で、暗灰色砂質シルトが堆積する。土師器・須恵器が出土し、鎌倉時代頃のものと考えられる。

S D 1333

調査地北部で検出された検出長17.0m、深さ35cm前後の南西～北東方向の溝である。調査区北壁に接して検出されたため、遺構の幅は不明である。埋土は灰褐色シルトと灰白色板細砂がラミナ状に堆積し、遺物は出土しなかった。東端ではわずかに北方向に屈曲するようである。時期は不明である。

S D 2001

調査地中央南で検出された逆L字形の溝で、検出長13.0m、幅30cm、深さ20cmを測る。暗灰色粘質土が堆積し、弥生土器が1点出土した。刻目貼付突帯が1条施され、おそらく壺の一部と考えられる。器壁は6mmと薄く、胎土は粗い。出土遺物から弥生時代前期と考えられる。



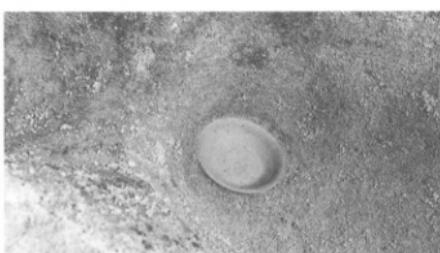
挿図写真8 S D 2001(南西から)



図44 S D 2001

9. ピット

ピットは調査地全体に散見される。大半が直径20cm、深さ10cm前後である。掘立柱建物が見られる箇所では、建物に復元できないピットも多く、建替等が想定できる。また、S E 101周辺には15cm前後の柱痕跡が見られるピットが散見されるため、建物が存在した可能性が高い。出土遺物はほとんどが土師器・須恵器の小片で、時期の判別がつかないものが多い。図化可能なものは、須恵器(45・46)と土師器(47)であった。



挿図写真9 S P 1236遺物出土状況(南から)

45はS P 1236の底面に埋設されたような状態で出土した須恵器小皿で、口径8.8cm、器高2.3cmを測る。底部はやや厚みをもち、体部との境界はやや薄くなる。口縁端部はまた肥厚する。出土遺物から鎌倉時代前後と考えられる。46はS P 1193から出土した須恵器塊で、口縁端部がやや外方につまみ出される。外面にはヘラ状工具と考えられる調整痕が明晰に残る。47はS P 1198から出土した土師器の羽釜で、鉗端部は下方に拡張する。外面にはススが付着する。いずれも、鎌倉時代頃のものと考えられる。

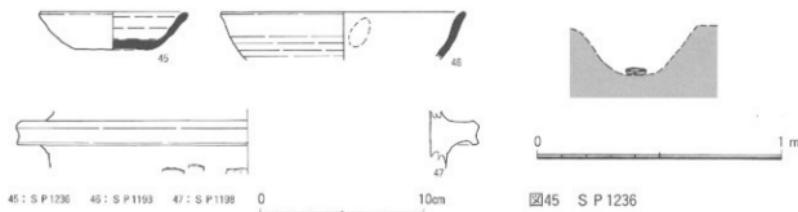


図46 ピット出土遺物

8. 鋤溝

調査地の北部を除くほぼ全面で、幅20cm、深さ10cm前後の鋤溝が検出された。特に調査地中央～西部では多方向の鋤溝が互いに切り合って検出された。出土遺物からN25°Wの方向の溝が最も古いと考えられ、飛鳥時代のものと考えられる。現在の地割に並行する北東～南西方向の溝は、平安時代末～鎌倉時代初頭と考えられる掘立柱建物と切り合っていることや、黒色土器が出土していることから、平安時代中期～後期のものと考えられる。また、北西～南東方向の溝については切り合い関係や埋土の差から、2時期ほどの時期差があるものと考えられる。一方、S D 1103を境に東部では、方向を異にする鋤溝がわずかに検出されるだけである。これらの溝は遺物包含層の上層で検出されたことから、比較的新しい時期のものと考えられる。

遺物はいずれの鋤溝からも小片がわずかに出土しただけに止まっている。図化可能なものは、S D 1126から出土した弥生土器・須恵器の2点で、その他土師器・黒色土器・須恵器の小片が出土した。48は弥生土器壺の口縁部である。下層からの混入品であると考えられる。49は須恵器環身で、口径13.8cm、器高3.2cmを測る。口縁部は短く内傾して立ち上がり、器形は扁平な形状をする。



図47 鋤溝出土遺物



挿図写真10 鋤溝掘削状況

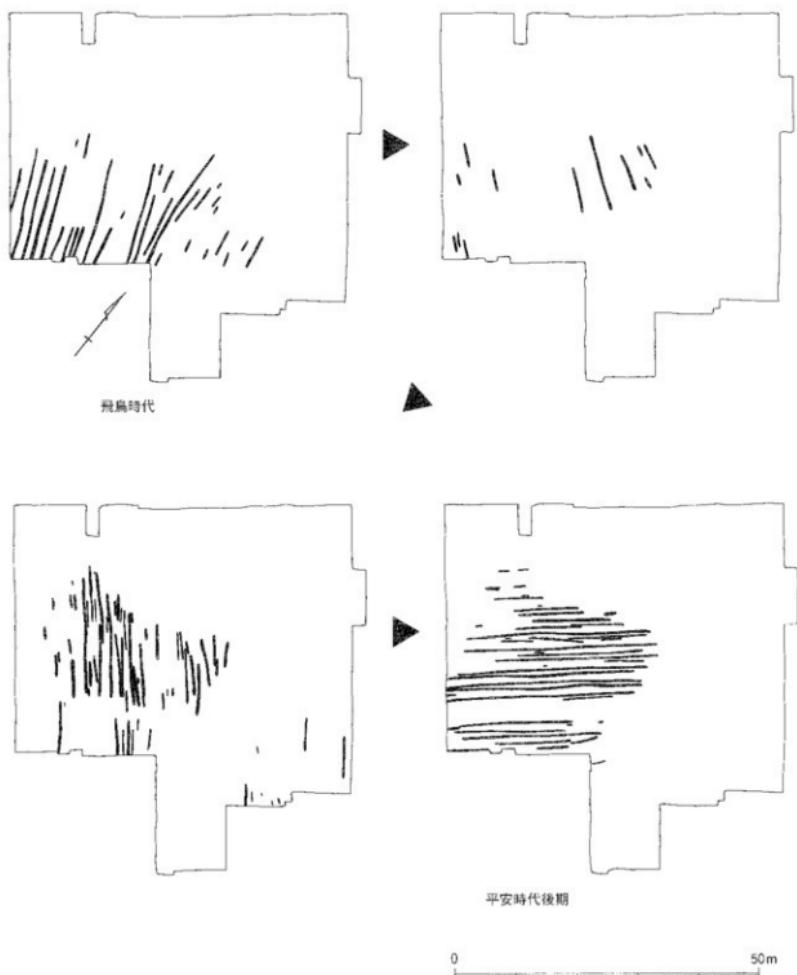


図48 鉢溝変遷図

註

(1) 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

第3章　まとめ

第1節　遺跡の変遷

今回の調査では、弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。大橋町遺跡は第1章でも触れたとおり北は松野遺跡、南は二葉町遺跡にはさまれた遺跡である。そのため両遺跡と共に多くの点が多く、それぞれの遺跡が存在する時期の遺構が検出された。

弥生時代

溝 S D2001と浅いピットを検出したのみであった。出土した遺物から弥生時代前期～中期の遺構と考えられ、この時期の遺構は二葉町遺跡でも溝などが検出されているが、二葉町遺跡でも遺構の密度は希薄である。そのため、大橋町遺跡を含め周辺では、この時期の居住域が形成されていたとは考え難い。

古墳時代

溝 S D1105を検出したのみである。遺物包含層からもこの時期の出土遺物はあまり出土しておらず、大橋町遺跡に集落の中心があったとは考え難く、北側の松野遺跡の集落範囲が伸びているものと考えられる。この時期には松野遺跡の南側日吉町で多くの堅穴住居が検出され、滑石製模造品による祭祀を行なっており集落の中心的様相が濃い。そのことから今回検出された溝は、集落域を区切るような区画溝のような機能をもっていた可能性がある。また、S D1105から出土した須恵器杯身(43)は底部に手持ちヘラケズリを施すといった古相を示す技法が見られる。しかし形態は後出の須恵器の特徴に類似することや、共伴する須恵器(42)などから、6世紀前半頃のものと考えられる。

飛鳥時代～奈良時代

調査地西部で鋤溝を多く検出したのみで、生産域として利用されていたことが判明した。S D1105から西側にはあまり鋤溝が検出されていないため、この時期にあっても S D1105が境界のようなものとして意識されていたようである。

平安時代～鎌倉時代

大橋町遺跡の最盛期といえる時期である。平安時代後期までは現在の地割りに並行する鋤溝が検出されているため、以前は耕作地であったものと考えられるが、後期以降、掘立柱建物で構成される集落が営まれ、調査地西部で検出された掘立柱建物は数回の立替が行なわれ、継続的に集落が営まれていたことが判明した。S D1103を境に耕作痕を除き遺構の密度が希薄になることから、この溝が集落もしくは屋敷を区画する溝である可能性が高い。時期は異なるものの北側には S D1101・1333などの溝が存在し、これらも境界のようなものと考えられる。そしてこれらの溝に囲まれた箇所で建物群を検出した。建物の柱穴から出土した遺物は少量であったが、上層の出土遺物や切り合い関係などから平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる。建物は東建物群(S B106～108)と西建物群(S B101～105・109)の小群に分けられるようである。東建物群は遺構の切り合いがなく、比較的短期間の建物群であったと考えられるが、西建物群は復元した建物でも重複しており、周辺にも多くの柱穴を検出したことなどから継続性のある建物群であったと考えられる。東建物群は総柱建物で構成されており、建物群の中でもやや先行すると考えられる S B106が存在し、屋敷基が存在することなどから、集落内で特異な位置を占めていた可能性も指摘できる。

図49は大橋町遺跡周辺の建物群の配置を示したもので、広い範囲に建物群が分布していることが解る。国

道2号線より北側では小規模のまとまり、南側では大規模なまとまりを形成する。既刊の報告書の成果から、南側の二葉町遺跡は建物群の範囲が広く建替も多い。一方その北側の大橋町遺跡・松野遺跡では範囲が狭く、立替も比較的少ない。時期的にも前者は13世紀まで継続するのに対し、後者は12世紀前半までにとどまる。そのことから、11世紀後半には二葉町遺跡を中心として北側に拡大し、12世紀後半にはまた規模を縮小して二葉町遺跡に戻るよう変遷すると考えられる。

鎌倉時代以降

鎌倉時代後半以降、建物跡などは検出されていないが、水道や井戸が数基検出されていることから、建物があった可能性は指摘できるが、かなり縮小した規模であったことが予想される。遺構面・遺物包含層上面に耕作土が堆積しており、江戸時代には耕作地であったことが予想される。



図49 平安時代末～鎌倉時代初頭の建物分布

第2節 屋敷墓

1. 中世の葬送

中世段階での死体の扱いについては、貴族は広大な敷地に墓地を形成し、菩提を弔っていたようであるが、一般民衆については平安京の賀茂川河原や紫野・鳥辺野などの地名に見られるように郊外の荒地などで風葬されており、その様子は『般若草紙』に詳しく描かれている⁽¹⁾。木棺・死体をそのまま放置しており、その肉を野犬が食り、白骨が転がる様子が描かれている。中には盛土を施すものや、塔婆・自然石を置くものなどが見られ葬送の形態が一元的なものではなかったことが解る。室町時代以降、集落では集村が進み、悲墓と呼ばれる集団墓地が形成されるようになる。このような例は京都府の福井古墓などに見られる⁽²⁾。

平安時代末から鎌倉時代にかけても同様の葬送が行われていたようであるが、大阪府宮田遺跡で中世の建物群の一角に木棺墓が築かれている状況で検出された。原口正三氏はこのような建物に近接して存在する土坑墓・木棺墓を屋敷墓として位置づけ、その被葬者が屋敷の創設にかかわる人物であると規定した⁽³⁾。また坪之内徹氏も屋敷墓の特徴をまとめている⁽⁴⁾。その後このような墓は西日本を中心に数多く確認されるようになった。当初は敷地内に墓を築くということから、身分が低く墓地に葬ることができないため築かれた墓であるという考え方⁽⁵⁾があったが、近年では橋田正徳氏⁽⁶⁾や勝田至氏⁽⁷⁾などが発掘調査資料や文献資料を基に屋敷墓について研究が進められている。橋田氏はかって坪之内徹氏が規定した屋敷墓の特徴について改正して以下のように述べている。

1. 西日本を中心に分布する。特に、京都・大阪・兵庫・岡山・福岡に多く分布する。
2. 上坑墓が多い。火葬墓も、少ないながら見つかっている。
3. 集落の共同墓地のように群集せず、単独あるいは二基から数基だけの場合が多い。
4. 建物との方位関係に法則性は見られず、屋敷内の境界的な場所に営まれている。

また、屋敷墓が存在する建物の規模としてA. 主屋が20~40m²のもの、B. 主屋が40~100m²のもの、C. 主屋が80m²以上、大型建物が2~3棟、占地面積が方半町~方一町のものを挙げ、A・Bを農民層、Cを在地領主層の建物とし、特にA・Bに屋敷墓が多く、建物の規模から一般的に屋敷墓が農民層の習俗であったとしている。

今回の報告では、主に橋田正徳氏の論考に基づいて記述を進める。

2. 神戸市内の屋敷墓

神戸市内では数多くの中世集落がこれまで発掘調査で明らかになりつつある。その資料をもとに神戸市内の中世墓については1997年に門野博史氏⁽⁸⁾が集成を行ない、六甲山南麓地域・西神地域・北神地域にわけてこれまで発見された中世墓を概観し、神戸市内での中世の墓制について考察された。この中でも宅原遺跡や上小名田遺跡などで検出された上坑墓・木棺墓を屋敷墓としてその屋敷の「屋敷に関わる人々の守神」であったと想定されている。門野氏の集成の後、震災復興関連の事業を中心に発掘調査件数が増えるに伴い、中世集落および中世墓の検出例も増加した。管見では発掘調査で明らかになった中世墓は火葬墓・蔵骨器なども含めると250基を越える。この中には北神ニュータウン内遺跡のように火葬土坑などが密集するようなものも含まれる。先述の屋敷墓の特徴である群集しないということから、その中から集団墓地のようなものを除外し、さらに近隣に建物・柱穴が検出されているものを抽出すると、30遺跡43基が残る。現在のところ、北区に集中して分布する傾向が見られる。供獻遺物は土師皿・須恵器塊が多く、白磁・青磁などの輸入磁器類・

刀子・短剣などの鉄製利器を供獻する例も比較的多い。中には火打金・鳥帽子・鏡・数珠などが見られるものも存在する。基本的には1~2個の塊と4枚前後の小皿がセットとなるようである。塊の種類や、その他副葬品により被葬者の階層が反映されることが予想される。この共伴関係に注目し、地鎮祭祀との関係について触れた江浦洋氏の論考⁽⁸⁾は興味深い。また、土坑墓・木棺墓のほかに火葬墓と考えられるものも建物に近い場所に築かれていることが多い。

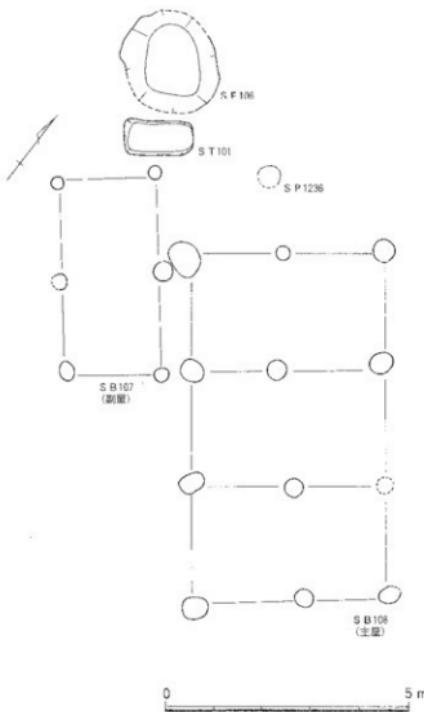
建物の規模は平均的に40m²前後のものが多く、中には100m²近い建物も見られる。二度以上の立替が大半の建物群で予想され、屋敷墓が付属する建物としてはこれまでの傾向と矛盾しない。土坑墓もしくは木棺墓が建物の内側に見られる例も多く、墓の掘削時期が建物のそれよりも早いと考えられる。屋敷墓が先代のように近い人物を埋葬したようなものであれば、問題ないように思われる。表には示さなかったが、建物群が近隣で検出してないものでも、大間跡例⁽¹⁰⁾のように一種境界的な意味合いが想定されるような場所に築かれるものも存在する。広義の意味での屋敷墓と考えられる。

3. 大橋町遺跡の屋敷墓

大橋町遺跡では、建物群が東西2群検出され、そのうち東建物群で屋敷墓と考えられる遺構が検出された。場所は、調査区のほぼ中央(1次~6調査地西部)で、建物の規模から主屋がS B 108(約30m²)、副屋がS B 107(約10m²)と考えられ、そこに井戸S E 106、土坑墓S T 101が付属する。S B 108の北側のS P 1236はピット底に須恵器小皿が埋納されている状況が確認されており、このピットは建物群に付属する地鎮遺構である可能性が高い。土坑墓はS B 107とS E 106の間に築かれている。出土遺物は須恵器塊1点、土師器皿1、土師器小皿2点である。また、それら遺物の下から齒片が出土した。これらのことから頭位が北東方向であったと考えられ、北頭位を志向する傾向が見られる。遺物は床面と考えられるところから約20cm浮いた状態で検出されており、それが埋葬後に置かれてあったことを示す。須恵器はちょうど墓坑の中央ラインに裏返した状態で配置され、土師器はそれに隣り合うように置かれる。27以外は完形を保って出土しており、土器の一部を打ち欠いた痕跡は確認されていない。

建物群は主屋・副屋・井戸が存在し、完

結性が高く屋敷としての体裁が整っている。図50 東建物群(屋敷)平面図



山口	57	90	96	98	98	96	96	98	96	96	98	96	96	98	96	96	96	96	96	96	96	96	96	96	96	96	96	96	
市役所	20	83				3	13	63	63	63	63												2	11	11	11	11		
新川	17					1.8	0.65			6	0.8												7	6	23	14.6~18	26	26	
OYO	—	—	—	—	—	—	—	—	1.95	—	0.35	14	14	14									17	17	17	17	17	17	
二郎丸	20	22	26	36	3	—	2	1.62	5.8	2.3	W	W	W	W	—	1	4	—	—	—	—	—	—	13	13	13	13	13	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.63	6.6	10.0	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
YEL	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
OYO	15								—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
EDO	3000	3000	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	
洋野村	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
七瀬町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
大手町	35							2	1.6	0.3	2.3	W	W	W					1		—	—	—	—	—	—	—	—	—
（21）	24								—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ZEN	15	—	—	—	—	—	—	—	1.1	0.4	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
玉造町	109	56	—	—	8	—	—	—	1.6	1.6	1.6	0.8	0.8	0.8	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
二丁堀	101	—	—	—	—	—	—	—	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
日向町	83	20	—	—	—	—	—	—	0	4.2	0.20	0.19	0.19	0.19	0.19	0.19	—	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
五井町	27	27	44	—	—	—	—	—	—	0	—	0.9	0.20	0.19	0.19	0.19	0.19	0.19	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
久保町	76																										2	2	
（31）	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
久保町	56	78	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
（32）	45	86	45	45	26	32	—	2	1.1	0.9	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	—	1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
（33）	32	36	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

建物は30m²・10m²の建物が組みになっており、A型で農民層のものと考えられる。供獻遺物も磁器・鉄製品などが副葬されず、須恵器・土師器と日常的なもののみを使用していることからも農民層の墓であるといえる。墓は建物の北側に建物に沿うように築かれており、屋敷墓の典型的な形態といえる。ただし、一般的に屋敷墓を伴う建物群はほぼ同様の場所で2回以上の建替えを伴うが、今回の例では建替えの痕跡は見られず一般的な様相と異なる。

4. おわりに

以上のことから、今回検出された墓は屋敷墓として捉えることが可能であると考えられる。その様相から一般的な農民層のものと考えられ、建物の時期差の問題があるが、おそらくSB106の建物の住人を祖先として、SB108を主屋とする屋敷を築造する際に、屋敷の繁栄などを願い埋葬されたものと推測される。しかし屋敷は建替えられることがなかったため、比較的短期間に廃絶したものと考えられる。一方西側の建物群は建替えが多く、継続性が見られることから、今回検出されていないが、この建物群にも屋敷墓が存在する可能性が高いと考えられる。

二葉町遺跡では屋敷墓と考えられるものが2基検出されているが、いずれの墓からも白磁・青磁などの輸入陶磁器が供獻されており、被葬者が富裕層であることを示している。一方大橋町遺跡のものは須恵器・土師器といった一般的な土器を供獻していることや、建物の規模などから農民層のものと結論付けている。また、神戸市内他の例でも供獻土器を持たないもの、輸入陶磁器・鉄製利器などを持っているものが混在している。それぞれ遺物の面から見ると富裕差が見られる。また建物の規模からみると、例外的に主屋が100m²を越えるものもあるが、おおよそ半屋が40~80m²のものが多い。さらに20m²程度の建物にも屋敷墓が付属するものも見られる。これらのことから橋田氏も指摘するように、貧富を問わず農民層に一般的な習俗として屋敷墓が築かれていたものと考えられる。

第3節 結びにかえて

大橋町遺跡では今回の調査で主に平安時代末～鎌倉時代初頭の集落が確認された。集落の形成以前は、耕作地として飛鳥～平安時代まで土地利用されてきたことが判明し、耕地が居住地に変遷していく過程が明らかになった。集落も平安時代末～鎌倉時代前半頃までの比較的限定された期間で、この時期の集落の形成過程を考える上で重要な調査であった。

また、今回の調査で検出された屋敷墓は平安時代後半に発生した墓制で、特に平安時代末～鎌倉時代にかけてもっとも顕著に見られる。大橋町遺跡で確認されたものは、これまで言われてきたように一般的な農民層のもので、屋敷墓としては典型的なものといえる。

水溜状遺構SX101はこれまで検出されたものと異なり、盛土により通路を設置するという特徴を持ち、このような遺構の使用状況を考える上で重要なものであったと考えられる。

以上のように今回の調査によって、新長田周辺の平安時代末～鎌倉時代の集落の一端が明らかになったものと考えられる。

註

- (1) 滝澤敬三編「日本常民生活絵引」神奈川大学常民文化研究所 1984
- (2) 兼康保明「古代・中世の墓制」「日本仏教民俗基礎資料集成 第1巻」日本公論美術出版 1976
- (3) 原口正三「大阪府高槻市宮田遺跡再考」「考古学論考 小林行雄先生古希記念論文集」平凡社 1982
- (4) 坪之内徹「中世における墳墓と葬制(五)」「摂河泉文化資料」第28号 1981
- (5) (2)と同じ
- (6) 桶田正徳「屋敷墓試論」「中近世土器の基礎研究VII」日本中世土器研究会 1991
- (7) 勝田至「中世の屋敷墓」「史林」71巻3号 1988
- (8) 口野博史「神戸市域の中世墓」「歴史と神戸」第36巻第3号 神戸史学会 1997
- (9) 江浦洋「中世土坑墓をめぐる諸問題」「日置莊遺跡(その3)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1988
- (10) 関野豊「大開遺跡第9次調査」「平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2004

(表出典)

東灘区

本山北遺跡

内藤俊哉「本山北遺跡 第2次」「平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1996

郡家遺跡

藤井直正他「郡家遺跡」大手前女子大学史学研究所 1993

灘 区

徳井町遺跡

妙見山麓遺跡調査会「灘・徳井町遺跡 現地説明会資料」1989

長田区

御船遺跡

長濱誠司他「御船遺跡II」兵庫県文化財報告第277冊 兵庫県教育委員会 2005

若松町遺跡

口野博史「若松町遺跡第2次調査」「平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001

二葉町遺跡

川上厚志編「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・10次調査」神戸市教育委員会 2001

須磨区

松野遺跡

口野博史編「松野遺跡発掘調査報告書第3~7次調査」神戸市教育委員会 2001

行幸町遺跡

神戸市教育委員会・(財)神戸市体育協会「行幸町遺跡の発掘調査」現地説明会資料 2003

垂水区

垂水日向遺跡

丸山潔「垂水日向遺跡第9・10次調査」「平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1996

野田遺跡

阿部嗣治「野田遺跡」「平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1992

西 区

玉津田中遺跡

籠宮正編「玉津田中 第1分冊兵庫県文化財調査報告第135~1冊」兵庫県教育委員会 1996

柄木遺跡

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「柄木遺跡発掘調査現地説明会資料」2000.2.26

居住・小山遺跡

千種浩「居住・小山遺跡」昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985

二ツ屋遺跡

前田佳久他「二ツ屋遺跡」平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995

日輪寺遺跡

山田清朝編「日輪寺遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002

北区

二郎宮ノ前遺跡

渡辺昇他「二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財報告第220号 兵庫県教育委員会 2001

淡河中村遺跡

村尾政人「淡河中村遺跡発掘調査報告書—本文編一」淡神文化財協会 1992

附物遺跡

橋詰清季「附物遺跡」「平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1993

野瀬遺跡

西岡巧次他「野瀬遺跡第4次」「平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2005

山口英正他「野瀬遺跡第5次」「平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2006

淡河木津遺跡

中村大介編「淡河木津遺跡第1次・第2次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002

上小名田遺跡

前田佳久他「上小名田遺跡第16次調査」「平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998

菅本宏明他「上小名田遺跡」「平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1992

神戸女子大学考古学研究室編「上小名田遺跡の研究」上小名田遺跡調査委員会 1994

下小名田遺跡

笹倉正典「神戸市北区八多町下小名田遺跡」妙見山麓遺跡調査会 2005

宅原遺跡

口野博史「宅原遺跡」「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1987

安田滋他「宅原遺跡」「昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1990

山田小学校内遺跡

丹治康明他「山田小学校内遺跡」「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1987

塙田遺跡

黒田恭正「塙田遺跡」「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1987

上津遺跡

丹治康明他「上津遺跡」「平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994

萩原城遺跡

黒田恭正「萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書—第一・3・5次—」神戸市教育委員会 2001

三尊谷遺跡

松林宏典「三尊谷遺跡」「平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1996

写 真 図 版



写真図版 1



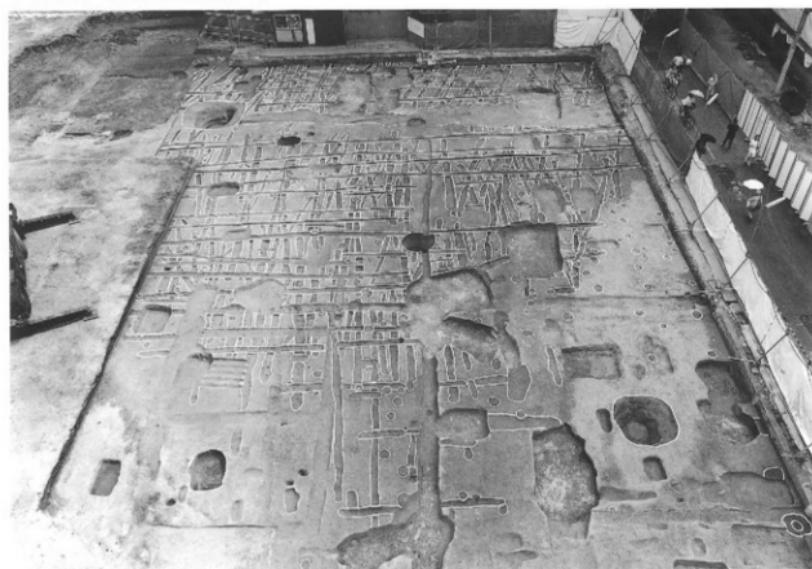
1 第1次-1調査地全景(北東から)



2 第1次-2調査地全景(北東から)

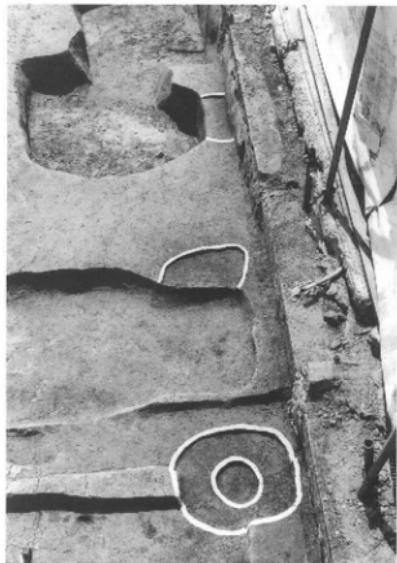


1 第1次-3調査地全景(北西から)

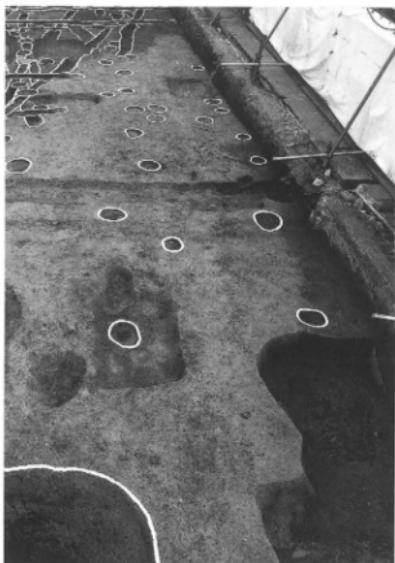


2 第1次-4調査地全景(北西から)

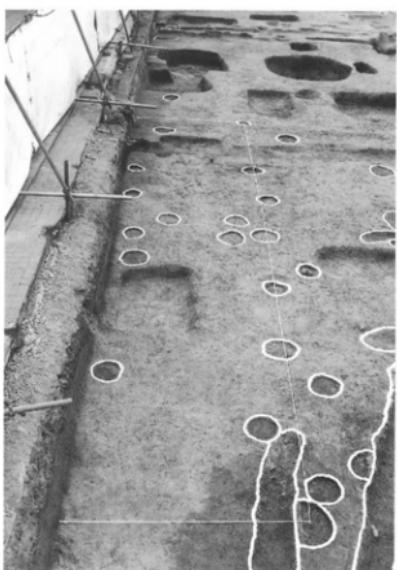
写真図版 3



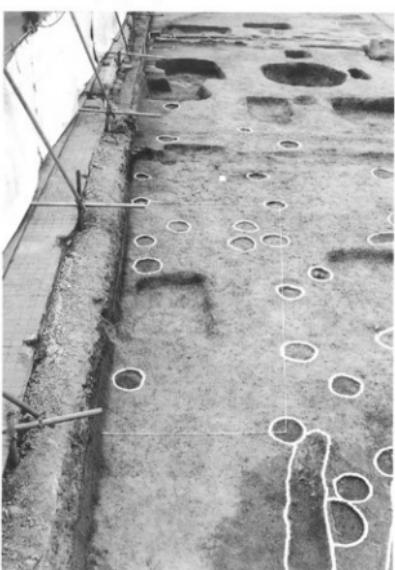
1 SB101(北西から)



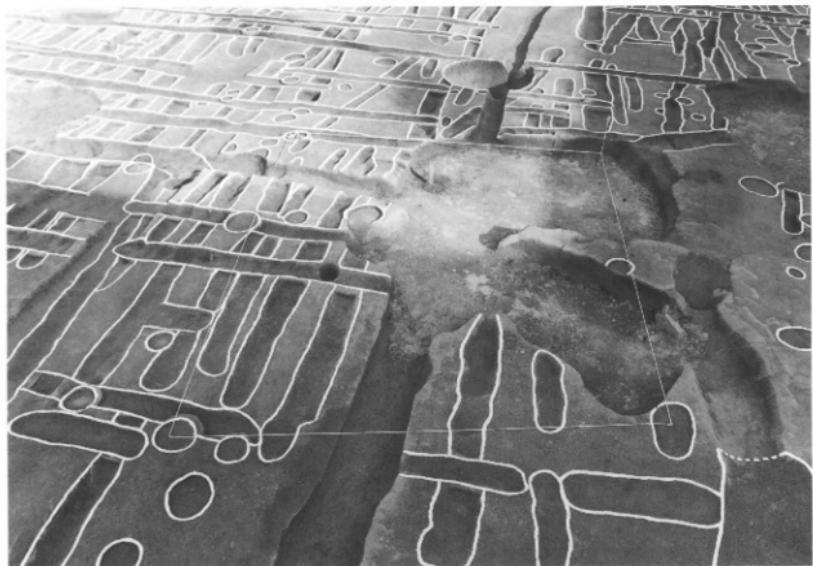
2 SB102(北西から)



3 SB103(南東から)



4 SB104(南東から)

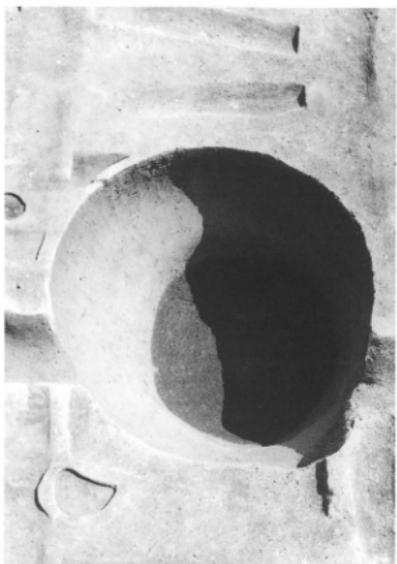


1 S B105(北西から)



2 S E101(南東から)

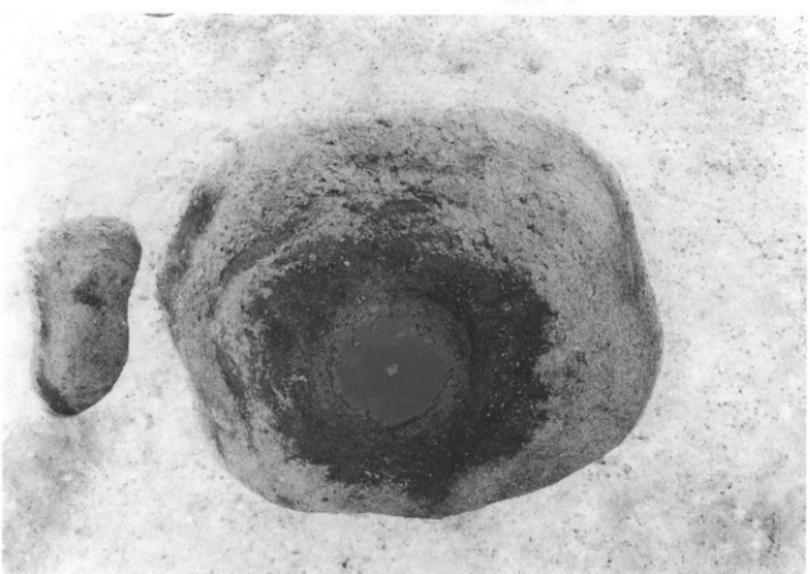
写真図版 5



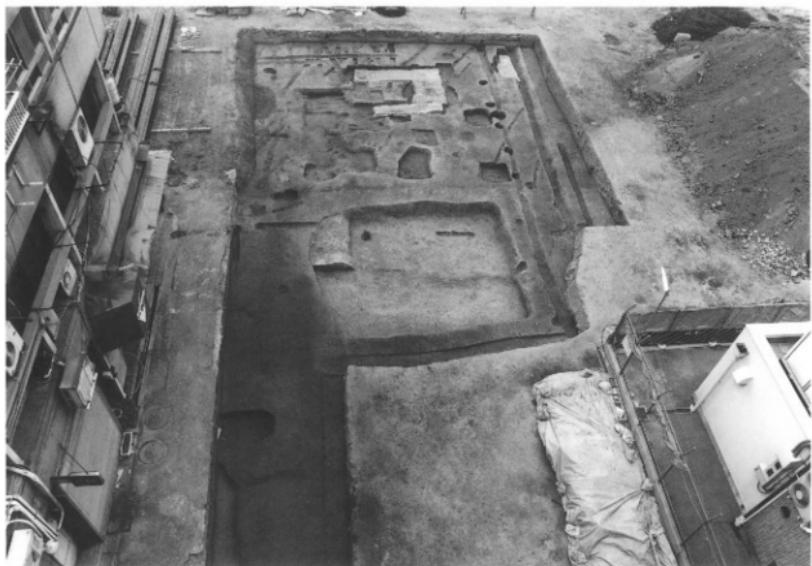
1 S E 102(南西から)



2 S E 103(北西から)



3 S E 104(北西から)



1 第1次～5調査地全景(南東から)

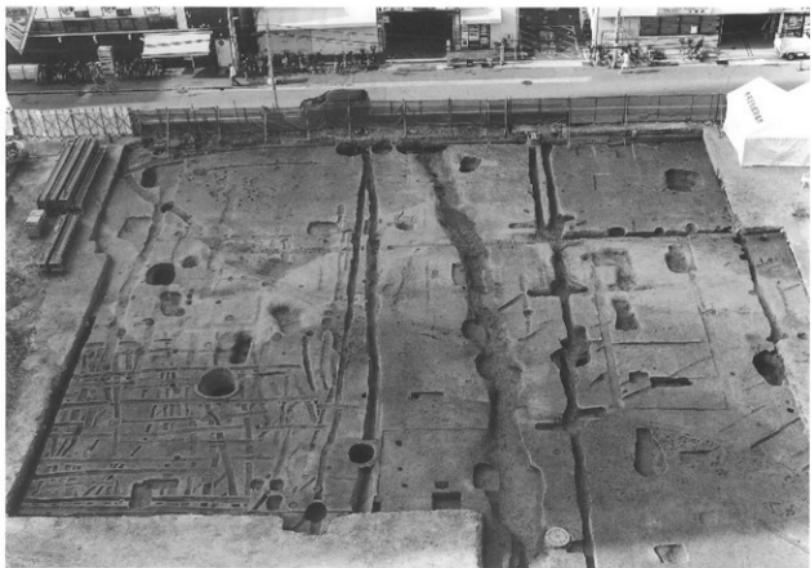


2 SX-101(南東から)

写真図版 7



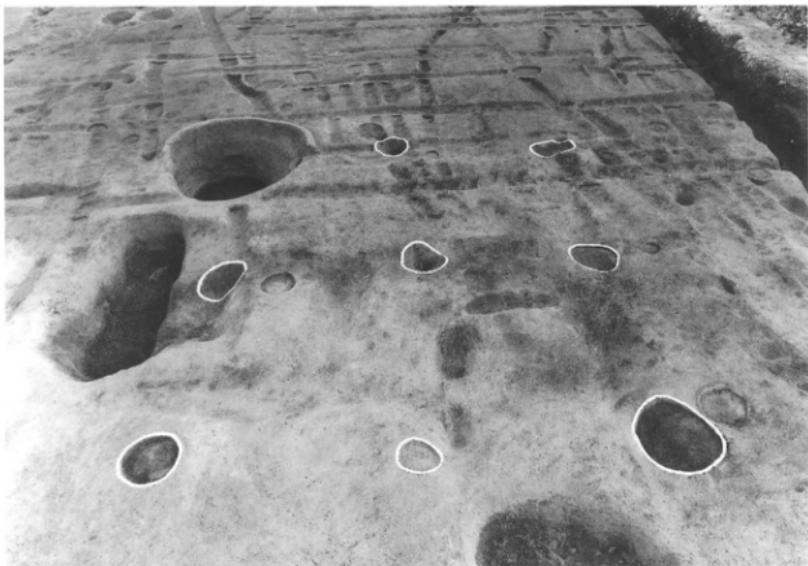
1 第1次一・6調査地全景(北東から)



2 第1次一・6調査地全景(南東から)

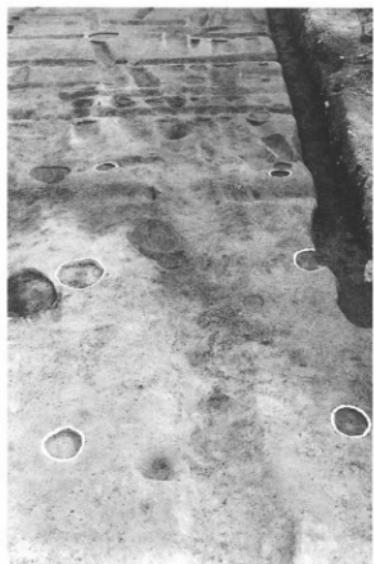


1 S B106(北東から)



2 S B108(北西から)

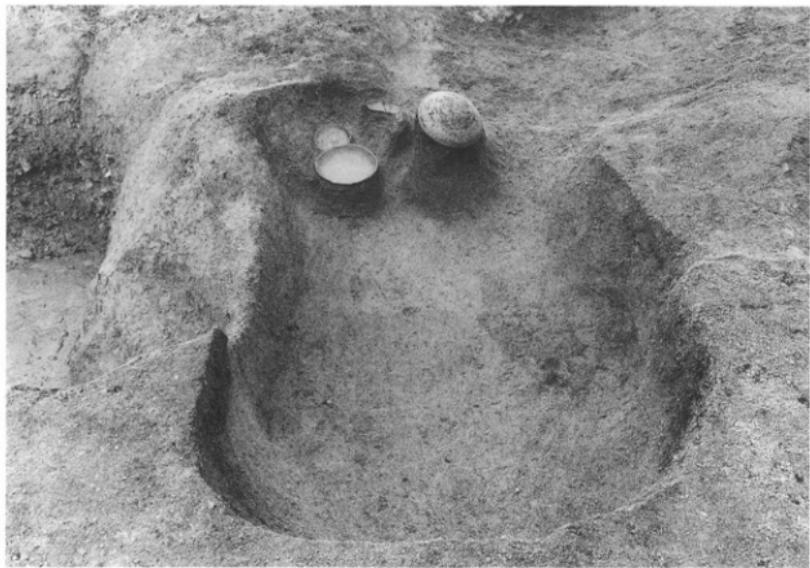
写真図版 9



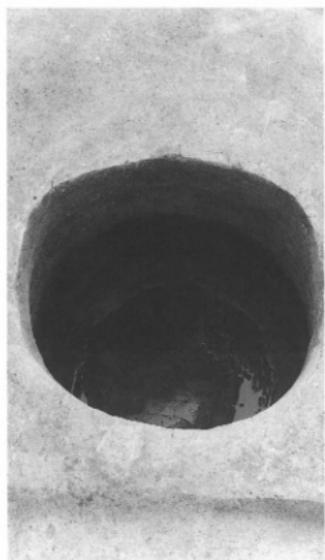
1 S B107(北西から)



2 S E106(北東から)



3 S T101(南西から)



1 S E 107(南西から)

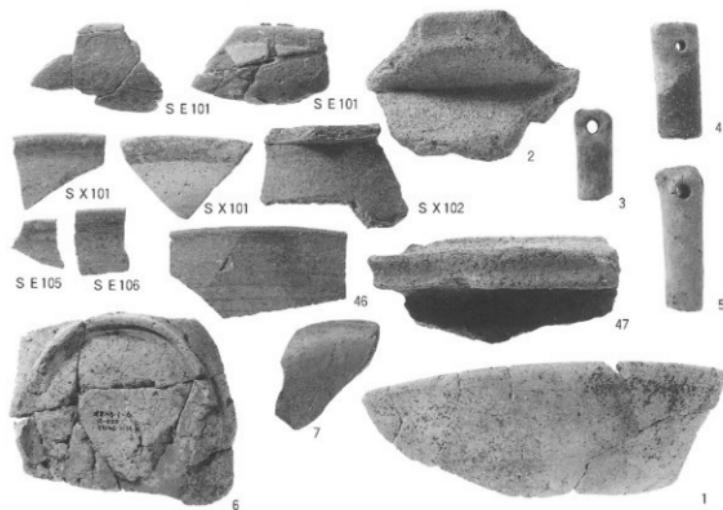


2 S E 105(北西から)



3 S K 102(南東から)

写真図版11

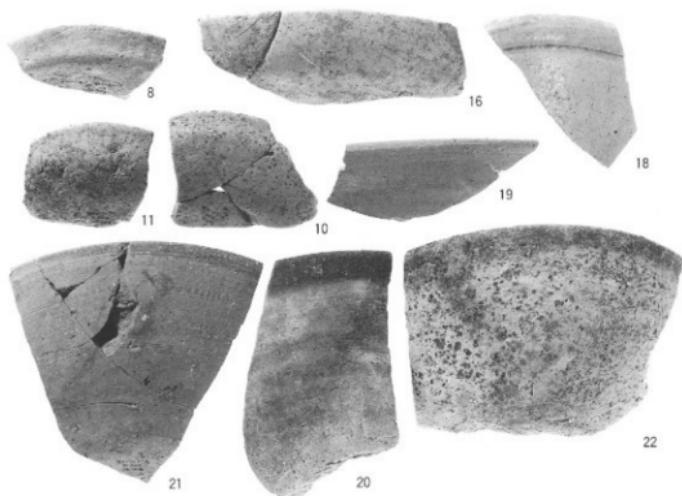


1 掘立柱建物・ピット・水溝・落ち込み出土遺物

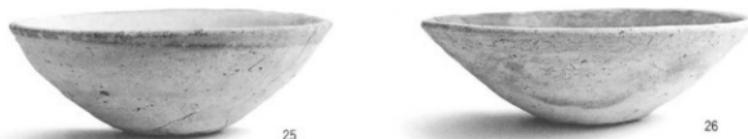


2 S E 104出土遺物 1

15



1 S E 104出土遺物 2



2 S K 102出土遺物



3 S T 101出土遺物

写真図版13



45

1 S P 1236出土遺物



2 S X 103出土遺物



38

44



33

3 S D 1101出土遺物



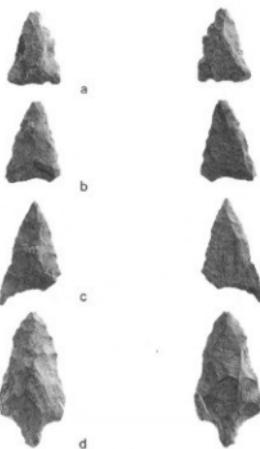
43



42

4 S D 1105出土遺物

5 碓石(38: S D 1103・44: S D 1105)



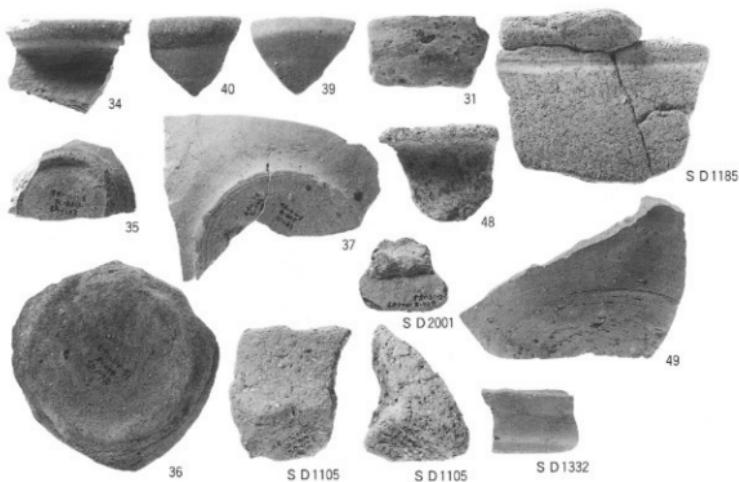
a

b

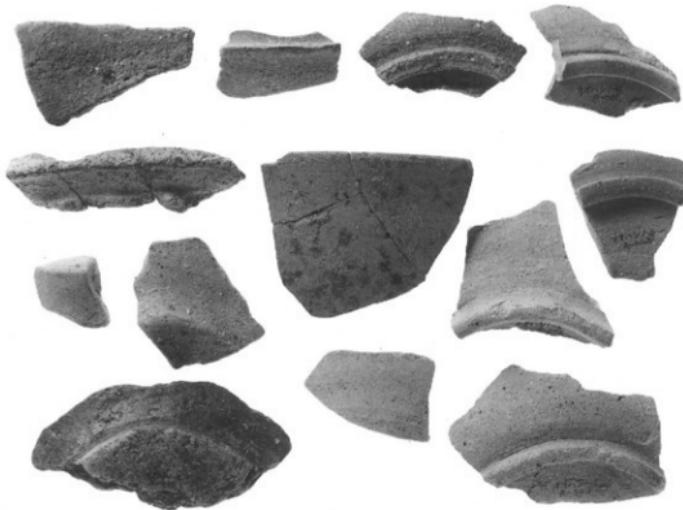
c

d

6 出土石錐(a・d:包含層・b: S D 1105・c: S E 105)



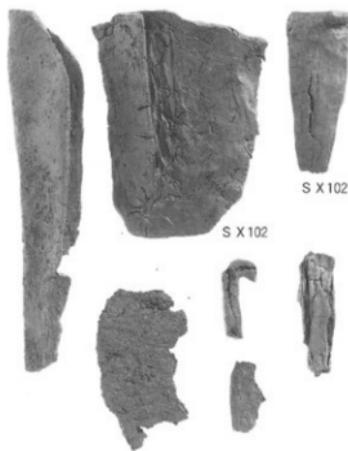
1 満・鉢溝出土遺物



2 遺物包含層出土遺物 1



1 遺物包含層出土遺物 2



2 出土鉄製品(S X 102以外は遺物包含層出土)



報告書抄録

ふりがな	おおはしちょういせき だい1じー1~6 はっくつちょうさほうこくしょ					
書名	大橋町遺跡 第1次-1~6 発掘調査報告書					
副書名	新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業(大橋5)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	中谷正					
編集機関	神戸市教育委員会					
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号					
発行年月日	西暦2006年3月31日					
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査原因	
	市町村	遺跡番号				
大橋町遺跡	兵庫県 神戸市 長田区 大橋町 5丁目	28106	34度 39分 7秒	135度 8分 54秒	新長田駅南地区震災復興第二種市街地 再開発事業	
調査期間	調査面積(m ²)	調査期間	調査面積(m ²)	調査期間	調査面積(m ²)	
第1次-1	145	第1次-2	165	第1次-3	175	
2004.05.12~		2004.06.03~		2004.06.28~		
2004.06.03		2004.06.29		2004.07.30		
第1次-4	710	第1次-5	245	第1次-6	1080	
2004.08.02~		2004.09.01~		2004.09.08~		
2004.09.03		2004.09.17		2004.11.05		
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
大橋町遺跡	集落跡	弥生時代~近世	掘立柱建物・井戸・水溢状遺構・土坑・溝・墓・鰐溝	弥生土器・土師器・須恵器・白磁・陶磁器	平安時代末~鎌倉時代初頭の屋敷墓	

大橋町遺跡 第1次-1~6 発掘調査報告書

2006.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課
 〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
 TEL 078-322-6480

印刷 大和出版印刷株式会社
 〒658-0031 神戸市東灘区向洋町東2丁目7番2号
 TEL 078-857-2355



本書は、再生紙を使用しています。